

2019 年度修士論文

中動態としての建築のあり方に関する研究及び設計提案

首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域

18852514 金田 駿也

指導教員 小泉 雅生

目次

第1章 序論

- 1.1 背景と目的
- 1.2 本論の構成

第2章 中動態という概念

- 2.1 言語における中動態
- 2.2 芸術鑑賞に見られる中動態
- 2.3 中動態的に思考する
 - 2.3.1 現象的
 - 2.3.2 再帰的
 - 2.3.3 媒介的

章結

第3章 中動態としての建築

- 3.1 建築を中動態として考える
 - 3.1.1 芸術作品との相違
 - 3.1.2 建築家の作家性と中動態
- 3.2 諸理論との接続
 - 3.2.1 矛盾の存在
 - 3.2.2 動的な状態
 - 3.2.3 経験の次元

章結

第4章 中動態としての建築の構築

- 4.1 構成手法に見られる中動態的思考
- 4.2 意味的構築
 - 4.1.1 境界の曖昧性
 - 4.4.2 構成の重層
- 4.3 知覚的構築
 - 4.3.1 経験からのズレ
 - 4.3.2 経験からの構築

章結

第5章 建築的操作の分析

5.1 分析対象の抽出

5.2 境界の曖昧化

断片の緊張関係 / 形式の揺らぎ

5.3 構成の重層

強弱の調整 / 身体・架構スケールの共存

5.4 経験からのズレ

静寂の創出 / 連続性と違和感

5.5 経験からの構築

移動へのメリハリ / 小さな構築

章結

第6章 設計提案

6.1 敷地

6.1.1 生きられた空間としてのニュータウン

6.1.2 計画都市の空白

6.1.3 ニュータウンとヤギ

6.2 設計プロセス

第7章 総括と展望

参考文献

論文梗概

第 1 章 序論

1.1 背景と目的

“中動態”とは、かつてのインド＝ヨーロッパ語の動詞体系において存在していた態の1つである。能動態における動詞の主語は動作主であり、動詞の表す過程から影響を受けないのに対し、中動態の主語は、主語でありながら、動詞の過程の中で何らかの影響を被る。つまり、私たちが現在使用している〈能動態－受動態〉という対立ではなく、〈能動態－中動態〉の対立であり、それはその動作主がその動作の過程の外側か内側であるかという対立を特徴としている。森田亜紀は『芸術の中動態』において、動作主が動作の過程に内にあるということは、動作主が「過程に巻き込まれて変化する」ことであるとしている。そこから芸術体験に関する記述から、作品を前にした際の、鑑賞者に作品世界が自ずと立ち現れてくる出来事に中動態的特徴を見ている。作品と鑑賞者を、主体と客体という図式で考えるのではなく、鑑賞するという行為によって、主体としての作品が現れてくるとしている。

このような中動態としての考えを建築に援用すると、「中動態としての建築」は、建築が能動的に使用者に行動を強いるような支配的なものではなく、ただ必要な空間だけを用意し目的のためだけに使われるような受動的なものでもない、使い手と建築とが相互的に作用し合うものであると言える。

そこで本研究では、能動でも受動でもない第三の態である中動態を考えることで、建築のあり方の新しい視点を切り開き、そして、それを設計として応用することによって、新たな建築と使い手との応答性を持った建築を提案することを目的とする。

1.2 論文構成

本論は研究の背景と目的を述べた序章、中動態の特徴と考え方を整理した第二章、建築における言説から中動態としての建築のあり方を定義した第三章、建築家による中動態に関わる建築の構成手法を分類、考察した第四章、作品分析における操作を整理した第五章、設計提案を示した第六章、総括としての結章の計7つの章からなる。

第2章 中動態という概念

第2章 中動態という概念

2.1 言語における中動態

2.2 芸術鑑賞に見られる中動態

2.3 中動態的に思考する

2.3.1 現象的

2.3.2 再帰的

2.4.3 媒介的

章結

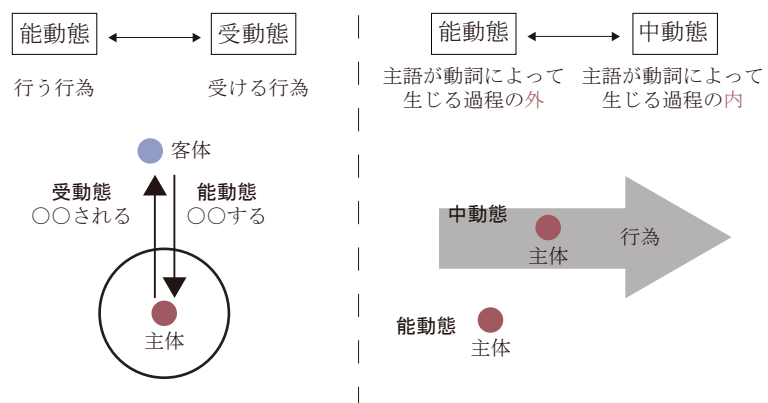
2.1 言語における中動態

現在の私たちには、ある行為において〈能動－受動〉の図式が当たり前となってしまうため、能動態で「私は絵を描く」と言うとき、「私」が創作行為の主体であるかのような単純化が行われてしまう。それに対して、古代インド＝ヨーロッパ諸言語の動詞においては、「絵を描く」という行為において主体が成立していく状態を表現する“中動態”という態があり、〈能動－中動〉の図式が存在したという。

「能動態では、動詞は、主語から出発して主語の外で実行される過程を示す。中動態はこれとの対立によって定義されるべき態であるが、そこにおいて動詞は、主語が過程の座であるような過程を示し、主語は過程に対して内的である。」(BENVENIST.1950)(p27「芸術の中動態」)

とした。

つまり、〈能動態－中動態〉の対立は、“〈能動態－受動態〉の対立＝『行う行為－受ける行為』の対立”とは別の次元であり、主語が過程に対して『外的であるか内的であるか』の対立であるとしている。



2-1 〈能動態－受動態〉×〈能動態－中動態〉の違い

2.1 言語における中動態

能動態の主語は生じている過程の外にあり、巻き込まれることはなく過程を支配するような動作主として存在している。これに対して中動態の主語は、外部の動作主からくる働きかけを受けることではない。ただ動詞の表す過程に巻き込まれ、過程の中で何らかの違った状態になる。それらのことから中動態は能動態や受動態とは違って、自己同一的な項と項との関係で物事を捉えないとしている。

また、國分功一郎は「中動態の世界 – 意思と責任の考古学-」において、中動態は行為を描写する言語とし、それに対して＜能動－受動＞の対立においては意思の概念が存在するという。＜能動－受動＞を行為者を確定する言語、出来事を私有化する言語とした。

能動態と受動態の二つである。これは全ての行為が「する」か「される」かのいずれかに配分されることを求めるが、前提として意志の概念が存在する。良きにせよ、悪きにせよ、自らの意志で行った行為であればそこに責任が伴うため、善悪の判断の基準になるのだ。(…) この対立によって見出だされるのは、主語が動詞によって示される過程の外にあるか内にあるかの違いである。要は能動態と受動態の対立が作り出す「する／される」とは別の対立があり、そこでは意志の概念が前景化しないのだ。

「中動態の世界 意思と責任の考古学」國分功一郎 2017

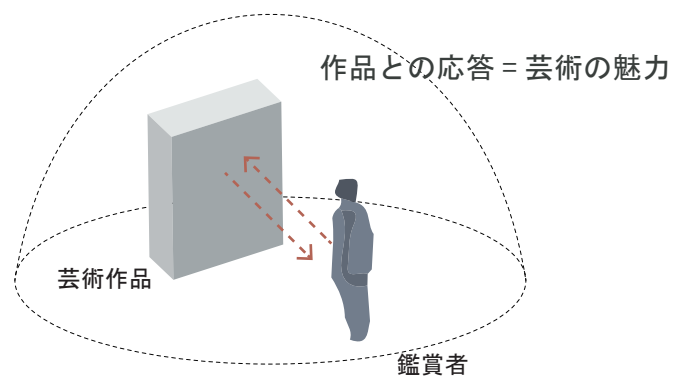
2.2 芸術鑑賞に見られる中動態

J. デューイは『経験としての芸術』（1934）において

「目は人間の身体にとって最も重要な器官である。すると、対象からの働きをうける。つまり、対象からお返しを受ける。そして、このお返しはまた次の新しい目の活動を誘い出す。その時、この活動には以前よりも増加した意味と価値が新しく付加されている。そして、目はこの活動を次々に進めることによって、美的な対象を不断に構築していくのである。芸術作品の尽きせぬ魅力と呼ばれるものは、まさにこの連続して進行する知覚活動全体が生み出す働きである。」

というような鑑賞者と対象との相互作用において芸術作品の魅力を見ている。

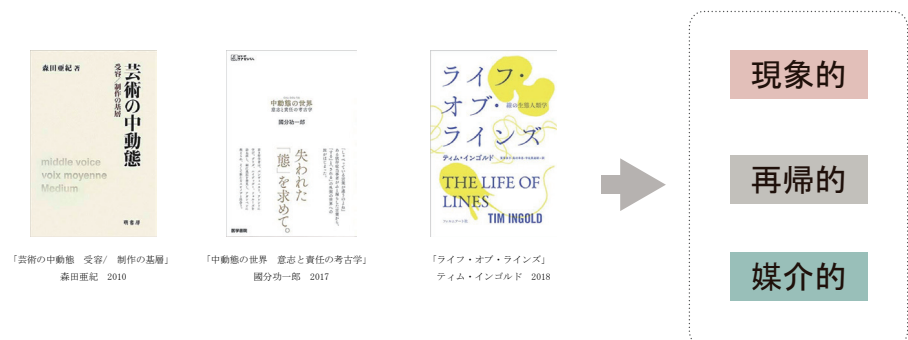
また、森田亜紀は『芸術の中動態』において、芸術体験に関する描写より、作品を前にした際の、鑑賞者に作品世界が自ずと立ち現れてくる出来事に中動態的特徴を見ている。作品と鑑賞者を、主体と客体という図式で考えるのではなく、鑑賞するという行為によって、主体としての作品が現れてくるとしている。



2-2 芸術鑑賞に見られる相互作用

2.3 中動態的に思考する

以上のような中動態で表現される行為には大まかに3種類の特徴が得られる。ただし、中動態そのものが状態という不確定ではないものを表現するもののため、以下に挙げる3つの特徴は微妙なニュアンスによるものである。また、これは明確に分類するためのものではなく、中動態的に思考していくことを掴むための大まかな枠組みとしての分類である。



2-3 概念の抽出

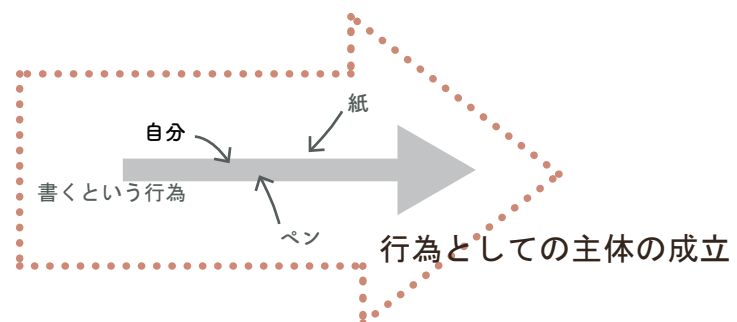
2.3 中動態的に思考する

2.3.1 現象的

まず1つ目は、その行為の主体が過程の中で成立し、過程を通じて変化していく状態である。

「中動態の、書くということにおいて、主体はエクリチュール（書く行為／書かれたもの）と直接に同時的なものとして構成される、エクリチュールを介して実現され、影響をこうむる。（ロラン・バルト）」

の言葉に見られるように、書くという行為の過程において、「書くもの＋書く行為」を通して、「書いている自分」という状態を構築するような、その出来事において全体としての主体が成立するような状態である。



2-4 行為における主体の成立

現象的

その行為の過程が生じ、その過程を通して主体が生まれてくる状態を表す。「もの」から出発するのではなく、「こと」が起こることから出発して、事態を捉える。その出来事における「媒介」としての主体を表している。

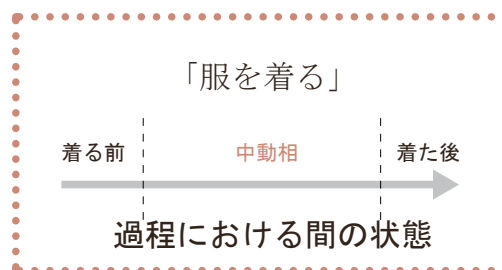
2.3 中動態的に思考する

2.3.2 再帰的

2つ目は、行為の主体と客体の区別がつかない状態である。

「中動態は、過程のうちにあるものが一でありながら二へ向かい、二へ向かいながら一であり続ける事態でもある。一と「二に分けられた一」との間なのだ。変化や差異を含んだ一、それ自身からずれていく一。同じものでありながら別のものになる（である）こと、別のものになり（であり）ながら同じものであり続ける。(p229、森田)」

というような、その行為の過程において主体と客体がの区別ができな
い、その過程の中で全体として変化しているような状態である。つま
り、行為が自分に対して戻ってくるような行為に巻き込まれて変化し
ていく「再帰的」であり、変化の場としての状態といえる。



2-5 間の状態

再帰的

動者-終 点(主 体-客 体) という二つの関与者が区別できない。その行
為の過程における、一でも二でもない間の状態を表す。過程の中で全体
が変化する表現。変化の座としての主体を表現する。

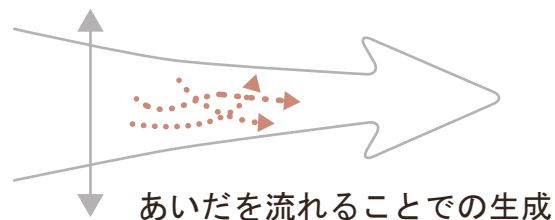
2.3 中動態的に思考する

2.3.3 媒介的

3つ目は、曖昧な状態における出来事を生成するような状態である。

「相互作用による媒介性というよりも、調和 (コレスポンス) という中程の流れ (ミッドストリーム) のうちで人や物が生成することへと当てられるべきである、と。(…) ラインが示されるのは能動態で受動態でもなく、中動態においてである。(…) 生成のラインとは常に中間にあるものである。それは中間によってのみ得られることのできるものなのだ。生成とは一でも二でもなく、また二という関係でもない。それはあいだのものなのだ。」(「ライフ・オブ・ラインズ」ティム・インゴルド 2017)

という「あいだの状態」に焦点を当てたものである。関係性だけでなく偶発的な出来事を生成していくような動的な状態であると言える。



2-6 生成のライン

媒介的

生成とは一でも二でもなく、それはあいだの状態であり、流動的な状態において生み出される。その状態は能動でも受動でもない、その状態に任せるような、途上の状態であり中動態で表現される。

章結

以上のように、出来事の過程を通して主体が成立するような「現象的」、行為の過程において主体と客体の区別ができず、その過程で全体として変化する「再帰的」、流動的な曖昧な状態において出来事が生成がされる「媒介的」の3つを示した。

これらの中動態的な思考を、次章で建築のあり方に結びつけていく。

中動態的思考	
現象的	その行為の過程が生じ、その過程を通して主体が生まれてくる状態を表す。「もの」から出発するのではなく「こと」が起こることから出発して、事態を捉える。
再帰的	動者-終点(主 体-客 体) という二つの関与者が区別できない。その行為の過程における、一でも二でもない間の状態を表す。過程の中で全体が変化する、変化の座としての主体を表現する。
媒介的	生成とは一でも二でもなく、それはあいだの状態であり、流動的な状態において生成される。その状態は能動でも受動でもない、その状態に任せるような中動の状態である。

第3章 中動態としての建築

第3章 中動態としての建築

3.1 建築を中動態として考える

3.1.1 芸術作品との相違

3.1.2 建築家の作家性と中動態

3.2 諸理論との接続

3.2.1 矛盾の存在

3.2.2 動的な状態

3.2.3 経験の次元

章結

3.1 建築における諸理論との関係性

3.1.1 芸術作品との相違

前章でまとめた中動態としての建築のあり方をより建築的な考え方に近づけるために、これまでの建築家・批評家の言説のなかで、中動態としての建築への視座を見出すと思われるものを選抜し整理する。建築における中動態いうものを明確にしていく。

ここで、建築を中動態的に考えることにおいて、建築はそもそも中動態として存在していると考えることができる。2章であげた芸術作品における製作者は、鑑賞者を想定しない。それに対し、建築は設計時に様々な使用者を想定し計画している。そして出来上がった建築に対して様々な人が利用するという過程が必ず存在する。使い込まれていくという過程における建築という主体の変化は図らずして行ってしまう。

本研究においては、図らずも中動態として存在してしまう建築において、より意識的に言及している言説を取り上げる。また、4・5章においては設計段階において、意図的に中動態としての建築のあり方を想定し、設計物においての実現を試みているものを取り上げる。

3.1 建築を中動態として考える

3.1.2 建築家の作家性と中動態

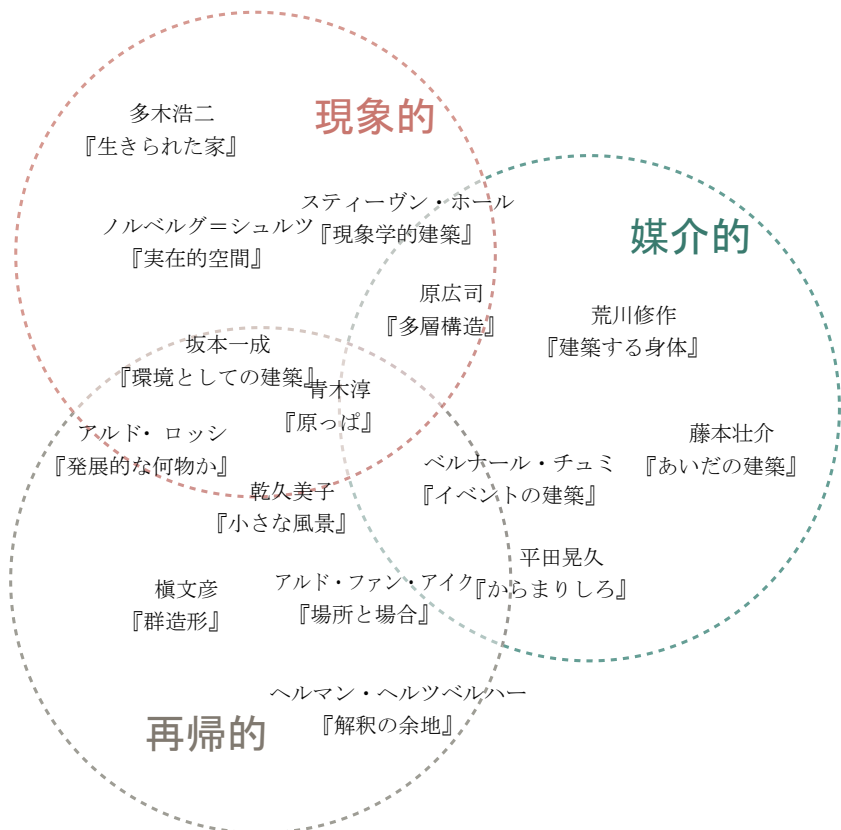
建築を中動態的に捉えるという視座において、作者としての建築家と社会との関わり方に関する考察はすでに青井によって行われている。それは『芸術の中動態』における森田の「作者の事後性」という考察を受けて「第一に通路の社会性（ヒトやモノの相互作用の集合性）がもたらす超過性をこそ本質とする制作実践を「コンセプトの具現化」といった息苦しい図式に押し込めること（ただし虚構としての事後的言説は抑圧すべきでない）、第二にそうした社会的産物を署名によって作品化することを、建築家による「創作の独占」と勘違いすることであろう。」（中動態—— 実践は作者をこえる〔201907 特集：これからの建築と社会の関係性を考えるためのキーワード11〕）としている。これは建築家と社会と建築作品との関わりにおいて創作者としての建築家の立ち位置を批判している。

本論においては、設計における最終的に現れるかたちとしての建築という、建築の形態に重点をおいて中動態的考察を行う。

3.2 建築における諸理論との関係性

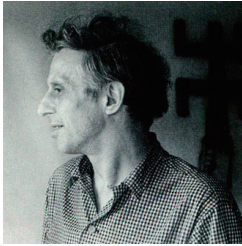
まず、抽出した建築家の言説と中動態的思考との関連性の検討を行う。前章で抽出した思考同士が明確な区別ではないため、それぞれにまたがる言説が存在する。以下の図のように関連性が見られた言説から、それらに共通する特徴を見出し、次項でそれぞれまとめていく。

また、この章ではあくまでも言説から抽出しており、建築家における作品が、本研究の目指す中動態としての建築とかどうかは考慮しないものとする



3-1 中動態的思考と言説の関係性の整理

■ Aldo van Eyck



3.2.1 矛盾の存在

「場所と場合は人間的な条件について相互認識を構成する。なぜなら、人間は建築にとって同時に主体でもあり、客体でもあるからだ。したがって、建築の基本的な機能は場所を場合のためにあらかじめ与えることである。中間的なものを確立することは対立する種々の極性を調和することである。それらが交差できる場所が与えられれば、本来あるべき一対現象を再び確立できる。」

「チーム 10 の思想」 Aldo van Eyck/ 他 2008

.....

Aldo van Eyck/ アルド・ファン・アイクは「対現象」という概念を提唱し、部分－全体、内－外、単一性－多様性、などの対義語の関係にある2つの現象が、それぞれの中間点を目指すような折衷的なものではなく、それぞれが意識されるような両義性が保ちつつ対立的な関係が成立するような状態が、空間の力によって人間の行為を誘発するとしている。

また、建築と人間との主体と客体関係の可逆性に言及し、建築は場合という出来事がおこる場を与えることとし、その場を実現するための対現象が実現するような空間の必要性を説いている。

■ 坂本一成



3.2.1 矛盾の存在

「永遠性と現在性、アイデンティティと活性化、記憶の家と今日を刻む家といった対立と矛盾のうちにわれわれは生きているのであり、それらの対立と矛盾の東証としての建築が生きた建築であるということができよう。だから、この矛盾して対立する二つを同時にもたらす対象としての建築を問題にせざるを得ないわけであった。そしてその時＜生きられた建築＞を作ることは、矛盾する両義性を一つひとつの建築で合一化させることであろう。」(p.97)

「建築に内在する言葉」坂本一成 2011

.....

坂本一成は、建築の持つアイデンティティと現在の使われている現在の空間が両立された矛盾の状態に我々は生きているとし、その矛盾し対立する2つを体現する建築が「生きられた建築」であるとした。

また、建築の魅力は「建築そのものの存在の力を示す意味の建築」にはない。(…)私たちの自由を許し活発な動きを促す環境としての建築にあると言える。(…)2面で引き裂かれている私たちの生身の身体と精神的身体とを共に支え、包括する建築にいま、建築の根拠を求めたい。」とし、場としての建築のあり方を示した。

■ 青木淳



3.2.1 矛盾の存在

「ひとつの实在が様々な読み取り方を許し、逆にそれによるさまざまな相の集合がひとつの实在をつくる。これは、ばらばらな様相をただ折衷させるということではない。ばらばらな様相を許容するプラットフォームを与えることではない。そうではなく、ひとつの实在とそれがもちえるさまざまな相を表裏の緊張な関係に置くことである。(p.36)」

「原っぱと遊園地」 青木淳 2004

.....

青木淳は「原っぱ」という「あらかじめそこで行われることを想定しないで (…) その空間と行為が対等になり得る」空間とは「ばらばらな様相をた折衷させるということ」ではなく、「さまざまな相を表裏の緊張関係に置くことである。」とした。

そして、建築を作る際に「原っぱ」を求める際、生成において決定ルールを目標の共有化という以上の意味を含んではいけないという「決定ルール、あるいはそのオーバードライブ」という方法論を提示した。

3.2.1 矛盾の存在

これらの言説から、変化の過程としての建築の存在（再帰性）、行為を生成するような動的な状態（媒介性）という中動態としての建築のあり方の条件として、「矛盾の存在」があげられる。建築において一つの全体性を目指すのではなく、ばらばらの状態を内在させ、それらが調和するのではなく、それぞれが同時に現れていることが重要であると言える。

①矛盾の存在

②動的な状態

③経験の次元

矛盾の存在

建築において複数の様相が同時に存在することによる豊かさがあること。

■Aldo van Eyck



「場所と場合は人間的な条件について相互認識を構成する。なぜなら、人間は建築にとって同時に主体でもあり、客体でもあるからだ。したがって、建築の基本的な機能は場所を場合のためにあらかじめ与えることである。」

アルド・ファン・アイク/他 「チーム10の思想」2008

■坂本一成



「現在の私自身の建築に対するリアリティは、(…) 私たちの生活、活動、行為といった私たち自身の現実に関わる、私たちの自由を許し活発な動きを促す環境としての建築」にあると言える。今日、ヴァーチャルなメディアでの世界とリアルな場という2面で引き裂かれている私たちの生身の身体と精神的身体とを共に支え、包括する建築にいま、建築の根拠を求めたい。(p.101)」

坂本一成 「建築に内在する言葉」2011

■青木 淳



ひとつの实在が様々な読み取り方を許し、逆にそれによるさまざまな相の集合がひとつの实在をつくる。これは、ばらばらな様相をただ折衷させるということではない。ばらばらな様相を許容するプラットフォームを与えることではない。そうではなく、ひとつの实在とそれがもたらされるさまざまな相を表裏の緊張関係に置くことである。(p.36)

青木淳 「原っぱと遊園地」2004

■ アルド・ロッシ



3.2.2 動的な状態

「建築は、われわれが欲する出来事に対して、たとえそれが実際に起ころうとも起こらずとも、その媒体となる。われわれが出来事を欲するとは、その出来事がヘーゲル的な意味で「発展的」な何物かになることである。(…) そうであるがゆえに机や住宅の規模なるものがきわめて重要である。むろん、このことは機能主義的な考えにもとづいて、そこにひとつの決定された機能が付与されているとみなすからではなく、かえって他のさまざまな機能がそこに許されるためである。つまるところ、人生で予知不可能なものすべてがそこに可能だからである。」(p.15.)

「アルド・ロッシ自伝」 アルド・ロッシ 1981

.....

アルドロッシは、出来事に対して建築が媒介になるとし、その出来事が建築を通して発展的な何かになるとしている。そこに媒介という装置としての建築のあり方を見ている。出来事を含んだ建築が発展的に別のものになるという巻き込まれていくような中動態的な視点がみられる。

■ 槇文彦



3.2.2 動的な状態

「私たちの提案する群造形は、停滞する造形から、動的な造形へ、単純な個性から多彩な社会生活への前進を意味している。柱が一本落ちてしまっただけでは成り立たない造形や(…) 記念碑的なコンポジションは、それ自身の一つの個性であっても、多彩な人間生活を包み、歴史的に発展してゆく社会を造形する手段にはならない。全く異質なものが付加されようと、それは全体としての機能または像に影響を与えない。それは与えられた条件に対してより適応性をもち、発展的であり、また弾力性を有する。」

「記憶の形象」 槇文彦 1994

槇文彦は、近代建築が指向したメガ、コンポジショナルフォームが持つ一義的な関係性を批判し、グループフォーム（群像形）の優位性を主張した。群像形という動的な造形は、全く異質であるもの蒸されても、全体の像としては影響を与えず、むしろさまざまなものへの適応性によって、発展的であるとしている。主体としての建築を強調せず、他者的な存在を包んで全体的な発展において主体を見ている。

3.2.2 動的な状態

■ 原広司



「様相論的建築（モーダル・アーキテクチャ）は、まず状態の建築であり、それぞれの瞬間に、まさに変わらんとする状態が示され、それゆえ、時間の建築であり、可能態としての建築である。（…）私たちは屋根や壁といったものを設計するのではなく、光・音・湿度・空気の動き等を設計する。そこに、人びと（動くアトラクター）は、最大の魅力として加えられる。つまり、ものから出来事へは、言い換えれば、ものから空間への移行であって、建築によって生起される諸現象を直接的に設計対象にする態度である。」

「様相論的建築」 新建築 2001年7月号

.....

原広司は、近代建築が求めてきたものを均質で単純でありつまらないとし、それらを乗り越える突破口としてさまざまな様相を持つ建築による多様性を提唱した。その様相論的建築は「状態の建築である」とし「まさに変わらんとする状態」を示しているとしている。

その可変的な状態はまさに中動態としての建築を目指していると言える。また、現象を含めた空間を設計対象とする態度の重要性を説いている。

3.2.2 動的な状態

■ ベルナール・チュミ



「いかなる建築も、イベント、行為、行動、そして機能を離れては存在しえない。建築は空間、行為、そして動きという三つの全くヒエラルキーのない同等のコンセプトの組み合わせによって成立している。(…)ここでイベントははじめてでも終わりでもない「転換点」と考えられる。(…)私はここで建築の将来はこれらのイベントの構築の中に存在していると主張したい。同様に重要なのはイベントに付随している空間化の問題である。そのようなコンセプトは統一された理想郷で确实性の保証を求めたいいわゆる近代主義のプロジェクトとは反対に、多重で断片化された未調停な地平を探求している。」

「建築と断絶」ベルナール・チュミ 1994

.....

ベルナール・チュミはイベント（行為）の構築の中に建築は存在するとし、そのイベントは「はじめてでも終わりでもない「転換点」と考えられる」としている。その転換点としての建築に必要な空間は多重の断片が自立しながら存在する状態としている。

■ 平田晃久



3.2.2 動的な状態

「ここで提示されているのは、建築が単体として獲得する美学ではない。建築が＜からまりしろ＞として他者を呼び寄せ、結果として全く想定できないほどに生命感に満ちたからまりあいを形成すること、そうしてされなるからまりを誘発していくような生き生きとした様子を獲得することこそ、ここでの美学的あるいは価値観なのである。」

「生命論的建築の研究—＜からまりしろ＞の概念をとおして」平田晃久 2016

.....

平田晃久は「からまりしろ」という「そこに絡みつくものを引きよせ、より高次のまとまりが形成されてゆく。」ような余地となるものの必要性を建築において提起した。その余地によって連鎖し絡まり合っていくことで建築が生き生きとした様子獲得していくとした。

これは中動態的な何かを生成する動的な状態と言えるのではないだろうか。

3.2.2 動的な状態

以上から、動的な状態（媒介的）、出来事によって建築という主体が現れ変化していくという時間の中における状態（再帰的）としての建築の思考と接続できることがわかる。よって、中動態としての建築のあり方の特徴の2つ目として「動的な状態」を抽出した。

①矛盾の存在

②動的な状態

③経験の次元

動的な状態

建築が構築されることでその場所が周囲を巻き込んで成長していくこと

■Aldo Rossi



「建築は、われわれが欲する出来事に対して、たとえそれが実際に起こることも起こらずとも、その媒体となる。(…)われわれが出来事を欲するとは、その出来事がヘーゲル的な意味で「発展的」な何物かになることである。」

アルド・ロッシ 「アルドロッシ自伝」1981

■横文彦



私たちの提案する群造形は、停滞する造形から、動的な造形へ、単純な個性から多彩な社会生活への前進を意味している。柱が一本落ちてしまっ成り立たない造形や(…)全く異質なものが付加されようと、それは全体としての機能または像に影響を与えない。それは与えられた条件に対してより適応性をもた、発展的であり、また弾力性を有する。

横文彦 「記憶の形象」

■原 広司



身体 / 意識と機能/様相という図式で説明され、刻々と変化していく建築を捉えるための理論である。その中で＜重ね合わせ/オーバーレイ＞「多層構造」という空間図式を提示し、時間を空間化し、記憶や意識の働きを説明する潜在力を持つとし、それらの層を横断する「経路」に応じて、現れ、傾向、停滞、間違い、雰囲気などの様々な「様相」が誘起されるとした。

原広司 「空間・機能から様相へ」

■Bernard Tschumi



「いかなる建築も、イベント、行為、行動、そして機能を離れては存在しない。建築は空間、行為、そして動きという三つの全くヒエラルキーのない同等のコンセプトの組み合わせによって成立している。(…)ここでイベントははじめでも終わりでない「転換点」と考えらる。(…)私はここで建築の将来はこれらのイベントの構築の中に存在していると主張したい。」

ベルナール・チュミ 「建築と断絶」1994

■平田晃久



何かが「からまる」余地（＝しろ）となるものが、そこに絡みつくものを引きよせ、より高次のまとまりが形成されてゆく。(…)そこには「無関係の関係」とでもいえる偶発的な関係性がある。しかし偶発的であるとはいえ、両者の間にある種の傾向の積極的な出会いがあることも確かである。「からまり」とはこのような偶発的かつ積極的関係のことを指す。

生命論的建築の研究—くからまりしろ—の概念をとおして - 平田晃久 2016

■ ノルベルグ＝シュルツ



3.2.3 経験の次元

「実存的空間は、一つの心理学的概念であって、それは、人間が、環境と相互に作用し合いながら満足に生活して行けるために発達させるシエマなのである。p97」

公的領域が私的世界の延長部分として認められたかのいずれかを意味しているのであって、その結果、人は、自分の住居に住むと同じように、公的な建築物の中にも「住む」と言いうるのである。

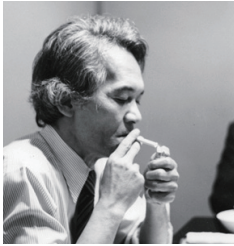
「実存・空間・建築」ノルベルグ・シュルツ 1973

.....

「場所」を「実存の意味作用を担う出来事を体験する目標あるいは焦点」であると同時に「われわれ自身を定位し、環境を手中に収める時の抛り所とする出発点でもある」とした。その環境について人間に安定したイメージを形成させるものを実在的空間とし、その実存的空間の具体化として、建築的空間を位置付けている。

建築において、人間と環境が相互的に作用し成長していく過程を見ている。それが住宅という私的領域外においてもありうることを示している。

■ 多木浩二



3.2.3 経験の次元

建築を構成する基本的な営みは、外面的な形に関するものと内部からの構成に関するものの2つに分けられる。内部・迷路、外部・仮面として昨日させることになる。建築の象徴性は、大まかにはこの2つの隠喩のタイプに分けられる。この空間図式は、建築を内部から構成する活動と関係し合っている。空間図式の方はまだ形に固定されていないもので、生き生きと自分の動きを実現しようとする動向にみちている。(…) 建築を内側から生成する活動は空間図式を形成し、修正し、かつ現実を同化する活動と根を同じくする。(p82)

「生きられた家 - 経験と象徴 -」 多木浩二 1976

多木浩二は「生きられた家」において「きられた家という以上、問題にしているのはそこに住む主体の経験に同化され、主体を同化した複雑な織物（テキスト）である。(p37) 空間を枠として行為を展開するというより、行為は空間として構造化される。生きられた家は「まえてもって計画できるものではない経験の空間に与える質が形成される。

この住むという行為によって家という行為を含めた主体が現れてくるという状態は中動態と言える。また、多木は「生きられた家は時代のデザインを無差別に利用し、風化し、恣意的でまがいものに充満しかねない空間である。生きられる空間はさまざまな矛盾にとむ現象であるが、同時に、知覚作用、知的操作、欲望の深さに基づく「生活術」に構造化された記号のテキスト（織物）なのである。」とし3.2.1で提起した「矛盾の存在」との関連性も見られる。

3.2.3 経験の次元

■ ヘルマン・ヘルツベルハー



1947年 プリンストン大学卒業
1950年 同大学院修士課程修了
1954年-1965年 ペンシルベニア大学で教鞭をとる。1966年『Complexity and Contradiction in Architecture』出版。1972年『Learning from Las Vegas』出版
1991年プリツカー賞受賞

重要なことは、形態と利用者が相互に支え合う影響を及ぼす意味を知ることと、意味を通じ合う能力である。ここでの主題は、形態と利用者との相互関係であり、両者が何をなし得るか、どうして互いに適切であり得るかということである。(…)モノづくりにおいては単に与条件に見合うだけでなく、それ以外の目的にも用いられるようにすべきなのだ。(…)そうしたものであれば、利用者の方も自分なりの対応ができようというものだ。自我流に解釈されることで、その物の方も、取り巻く環境に溶け込んでいくのである。

(…)形態は人により、状況により、様々なイメージを呼び起こし、様々な意味を持つのである。これが形態の意識を変える鍵であり、これによって一層、状況に即応する物を作り出せることにもなるのである。

「都市と建築のパブリックスペース」ヘルマン・ヘルツベルハー 1995

ヘルツベルハーは形態と利用者との関係において、物作りにおいては単に条件に見合うものだけではなく、利用者が自分なりにさまざまな解釈ができるようなものにする事で、環境と利用者が溶け込んでいくとしている。

■ スティーヴン・ホール



3.2.3 経験の次元

「絡みあいとは、内から外に交替する「あいだ」をもつ。われわれの身体は建築空間の実体を通じて動く、と同時に、われわれの身体は建築空間の実体と一体化する。」

「三次元の中で、身体という自己自身を、建築という複数のランドスケープで織り上げられたものの中に挿入し、かつそれを逆に身体の中へ挿入するという、相互挿入は、同一性と差異を産する。」

「GA ARCHITECT 11」 スティーヴン・ホール 1993

.....

スティーヴン・ホールはメルロ＝ポンティの「身体現象学」の影響を受け、建築において身体が経験することによって、建築と身体が絡み合い相互挿入することに建築の魅力を見ている。その絡み合いという事態を身体が自覚する時、建築的存在において「現象的建築」となっている。また、相互貫入はただ一体化するだけでなく、ものものとの差異を生み出すとし、経験により建築という主体が変化していくとしている。

■ 乾久美子



3.2.3 経験の次元

「偶然性を含めたプロセスの全てを設計することや、未来の全てを予測することが必要なわけではないのだ。必要なのは、プロセスのコマを進めるきっかけとなる最初の一手であり、その一手とは環境としての確かさである。(…)それは、人が反応し、つい関わってしまうような構造を内在化させることであり、そうすることで建設後に使い手と環境が一体となった場所としての成長を促すことである。」

「乾久美子建築設計事務所の仕事」 乾久美子 2019

.....

乾久美子は「小さな風景からの学び」において、使い手が環境を使いこなし、環境として一体となった場所を収集し、それらを分類し、そのような偶然性を含めたものに構成の類似を見ている。

そして建築はそのような使い手と環境が一体となった場所を目指すための建築に必要なものは、全てを予測するものではなく、人が使うきっかけを作り出すことであるとしている。

3.2.3 経験の次元

以上から、身体が挿入されていくことで出来事が生成され、建築という主体が生成されていくような現象的視点と、その出来事とともに変化し、発展していくような再帰的視点がみられ、3つ目の特徴として「経験の次元」としてまとめた。

①矛盾の存在

②動的な状態

③経験の次元

経験の次元

身体が空間に挿入されることにより 相互が浸透していく発展的過程をととして

■多木浩二



多木浩二は「生きられた家」において「きられた家という以上、問題にしているのはそこに住む主体の経験に同化され、主体を同化した複雑な織物（テキスト）である。（p37）空間を枠として行為を展開するというより、行為は空間として構造化される。生きられた家は「まえて計画できるものではない経験の空間に与える質が形成される。」

多木浩二 「生きられた家 - 経験と象徴 -」

■Herman Hertzberger



「変化の過程こそが、常に永続的な状態として把握されなければならない。何故なら変化しうること自体が常に重要であり、それが個々の形態の意味づけであるからだ。こうした変化に耐えるための、形態は無限の解釈を許容するようものでなければならない。そうすることで形態は、変化の中にアイデンティティを失うことなく、無限の意味を獲得し発散させるものになっていくのだ。」

ヘルツベルガー 「都市と建築のパブリックスペース」1995

■乾久美子



「偶然性を含めたプロセスの全てを設計することや、未来の全てを予測することが必要なわけではない。必要なのは、プロセスのコマを進めるきっかけとなる最初の一手であり、その一手とは環境としての確かさである。（…）それは、人が反応し、つい関わってしまうような構造を内在化させることであり、そうすることで建設後に使い手と環境が一体となった場所としての成長を促すことである。」

乾久美子 「乾久美子建築設計事務所の仕事」

■スティーヴン・ホール



「絡みあいは、内から外に交錯する「あいだ」をもつ。われわれの身体は建築空間の実体を通じて動く、と同時に、われわれの身体は建築空間の実体と一体化する。」「三次元の中で、身体という自己自身を、建築という複数のランドスケープで織り上げられたものの中に挿入し、かつそれを逆に身体の中へ挿入するという、相互挿入は、同一性と差異を産する。」

スティーヴン・ホール <現象と理念> GA

■ノルベルグ＝シュルツ



「実存的空間は、一つの心理学的概念であって、それは、人間が、環境と相互に作用し合いながら満足に生活して行けるために発達させるシエマなのである。（p97）公的領域が指摘世界の延長部分として認められたかのいづれかを意味しているのであって、その結果、人は、自分の住居に住むと同じように、公的な建築物の中にも「住む」と言いうるのである。」

（実存・空間・建築 昭和48年）

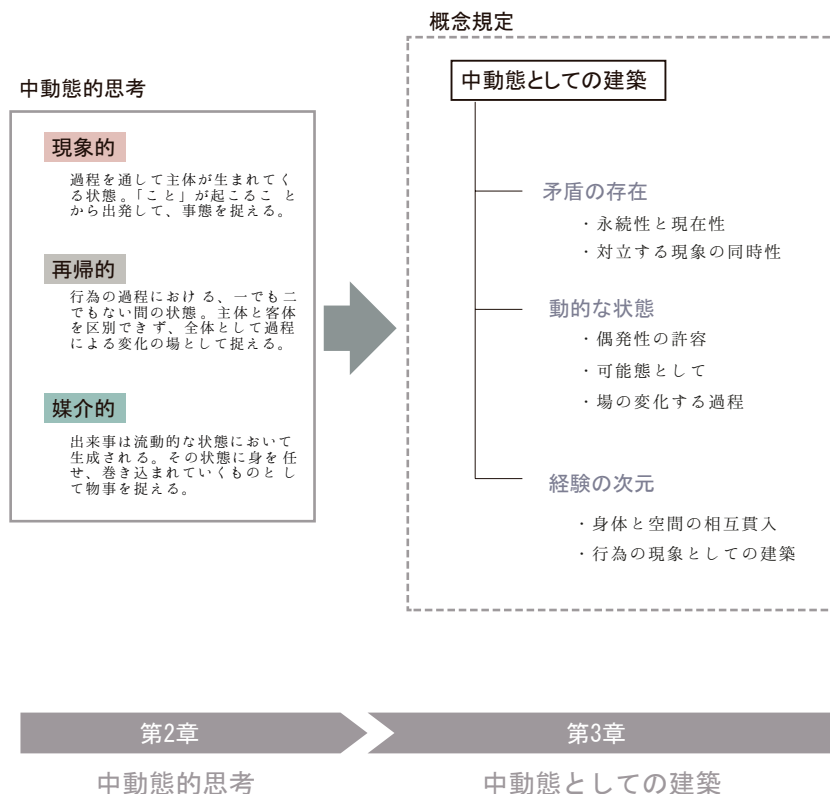
章結

前章で整理した3つの中動態的思考の方向性と、これまでの建築のあり方に関する建築家・批評家などの言説を整理し、「中動態としての建築」の性格として以下の3つに分析を行った。

まず、「矛盾の存在」として、アルド・ファン・アイク、坂本一成、青木淳の理論から、建築において複数の様相が同時に存在することによる豊かさがあることをあげた。

2つ目は「動的な状態」であり、B.チュミ、アルド・ロッシ、原広司、平田晃久などの理論から、建築が構築されることでその場所が周囲を巻き込んで成長していくことを整理した。

3つ目では「経験の次元」として、多木浩二、S.T. ホール、N. シュルツ、荒川修作より、身体が空間に挿入されることにより相互が浸透していく発展的過程をとりあげた。



第4章 中動態としての建築の構築

第4章 中動態としての建築の構築

4.1 構成手法に見られる中動態的思考

4.2 意味的構築

4.1.1 境界の曖昧性

4.4.2 構成の重層

4.3 知覚的構築

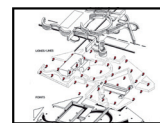
4.3.1 経験からのズレ

4.3.2 経験からの構築

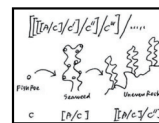
中動態としての建築のあり方の思考を実体としての建築に近づけていくにあたって、建築を構築していく上での手法する。これらの手法を経由することで、思考を建築という具象に近づける手がかりとする。



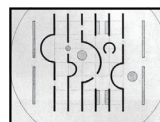
「多層構造」
原広司



「縫接」
ベルナール・チュミ



「階層性」
平田晃久



「中間領域」
アルド・ファン・アイク



「レイヤーの重層」
青木淳



「パースペクティブ」
スティーヴン・ホール



「固有性からの逸脱」
坂本一成



「類推的建築」
アルド・ロッシ



「ふと佇む場所」
ヘルツベルハー



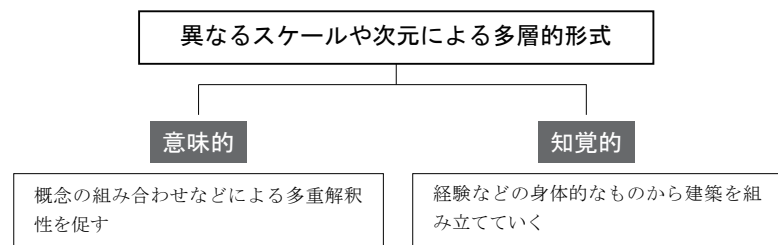
「小さな風景」
乾久美子

4-1 分析対象の構築手法

4.1 構成手法に見られる中動態的思考

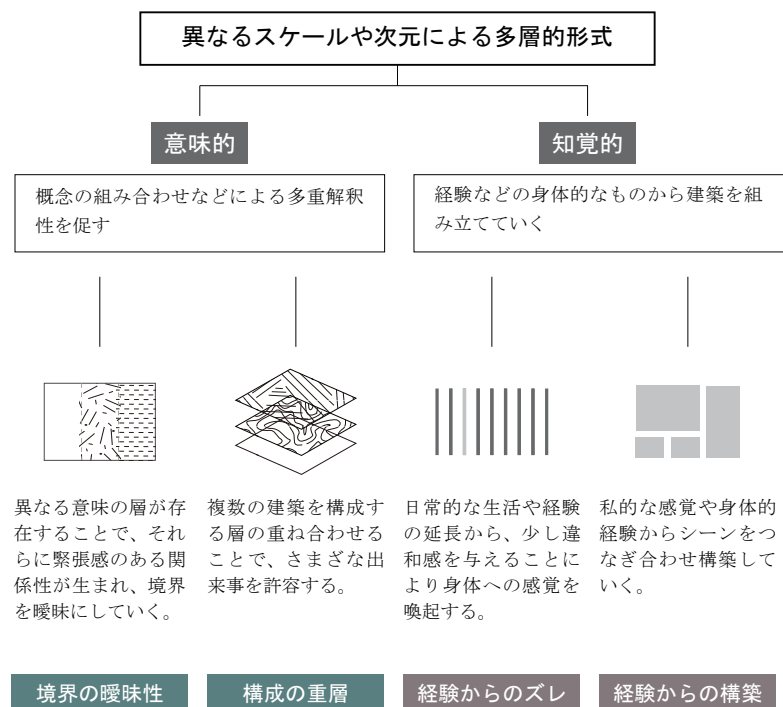
全体としてみられた特徴として、異なるスケールや次元を重ね合わせることで建築の形式性を弱めるような手法である。これらは、形式性を弱めることによって多様な解釈を許容するような空間を求めている。中動態としての建築を考える上で、建築という主体としての強さを求めないことは必然のように思われる。

その上で、建築を構築する手法をアプローチの方向から、概念の組み合わせなどによる多重解釈性を促すような「意味的構築」、経験などの身体的なものから建築を組み立てていくような「知覚的構築」の2種類に分類した。



4-2 方向性による分類

次に、意味的構築においては「境界の曖昧化」「構成の重層」の2つ、知覚的構築においては「経験からのズレ」「経験からの構築」の2つ、計4つに分類した。



4-3 分類の過程

4.2 意味的構築

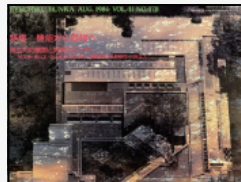
4.2.1 境界の曖昧性

まず、原広司の「多重構造」による図像の重ね合わせ、チュミによる「離接」という全体性を拒否し、要素同士を緊張関係におく状況の構築、平田の重層する「からまりしろ」による複合的構築の原理から、異なる意味の層が存在することで、それらに緊張感のある関係性が生まれ、境界を曖昧にしていく「境界の曖昧性」を抽出した。

境界の曖昧性

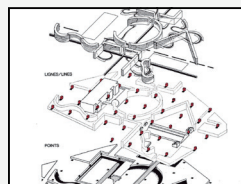


異なる意味の層が存在することで、それらに緊張感のある関係性が生まれ、境界を曖昧にしていく。



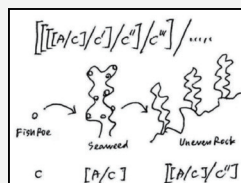
「多重構造」
原広司

「多層構造モデルの装置は、いわば図像を複雑に重ね合わせる（オーバーレイ）装置である。」とし、それによって図像要素の境界をあいまいにすることで、空間に曖昧さや時間的変化を取り入れる。



「離接」
ベルナール・チュミ

建築は多元的であり、複数的なものであるとし、「離接という術策は、事実が決して関係せず、衝突の関係が注意深く保たれ、統合あるいは全体性を拒否」し、多くの境界線は決して定まらない曖昧な状態であるとした。



「階層性」
平田晃久

重層するからまりの階層構造の一部として織り込まれた建築は、からまりしろの内部構造がそのまま複合的原理になるとし、その階層ごとの断層が刻まれたものが建築の魅力に加わるとしている。

4.2 意味的構築

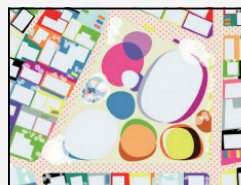
4.2.2 構成の重層

次に、アルド・ファン・アイクの「対現象」を実現する曖昧な空間を構築するための、さまざまな要素を重ね合わせ、青木によるばらばらな出来事を許容するための、スケール、解像度の違うレイヤーを重ね合わせから、複数の建築を構成する層の重ね合わせとして「構成の重層」を抽出した。

構成の重層

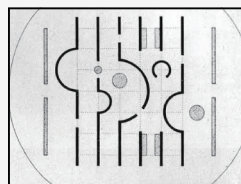


日常的な生活や経験の延長から、少し違和感を与えることにより身体への感覚を喚起する。



「レイヤーの重層」
青木淳

流動的なモノやコトを建築が留めるために「様々な解像度のレイヤーを何重にも被さることで、バラバラさを許容しながら、仮設程度の全体性」を構築する。



「中間領域」
アルド・ファン・アイク

「対現象」を表現するための手法として、様々な要素が重なり合う中間領域を用いている。対現象によって生まれたあいまいな空間は形態の持つ力によって人間の行為を誘発する場としている。

4.3 知覚的構築

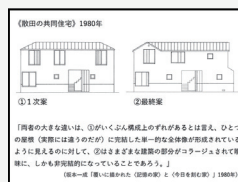
4.3.1 経験からのズレ

まず、知覚的構築において坂本一成の日常的なものをやや違ったスケール、配置に設定することによる、日常を保ちつつ違和感やズレを与えること、アルド・ロッシの記憶や体験を重ね合わせることにより、日常から新しい次元を開いていくような手法より、日常的な生活や経験の延長から、少し違和感を与えることにより身体への感覚を換気する「体験からのズレ」を抽出した。

経験からのズレ



私的な感覚や身体的経験からシーンをつなぎ合わせ構築していく。



「固有性からの逸脱」
坂本一成

「通常とやや違ったズレを生じさせる」ことにより日常的なリアルな状態を見せつつ、ささやかな違和感を与えることで私たちに自由を許し活発な動きを促す「環境としての建築」を生む。



「類推的建築」
アルド・ロッシ

記憶と体験を経て「部屋のもっとも高いところから一気に10メートルも落っこちた。」というような新しい次元を表現する可能性を探った。

4.3 知覚的構築

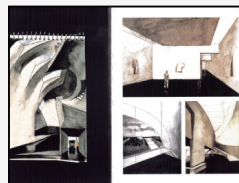
4.3.2 経験からの構築

最後に、S.T. ホールの身体の移動や知覚の変化という経験の断片から建築を設計していく手法、ヘルツベルハーの「ふとたたずめる場所」という感覚的に人々が寄り添いたくなるような余白を作っていくこと、乾久美子による「小さな風景」という使い手と環境が一体となった「何かいい」空間の蓄積による構築から、私的な感覚や経験からの構築の手法として「体験からの構築」を抽出した。

経験からの構築



複数の建築を構成する層の重ね合わせることで、さまざまな出来事を許容する。



「パースペクティブ」
スティーヴン・ホール

「視覚場を変化させながら、さらにそれを他の視覚物とも重ね合わせていく」ような経験からデザインし、建築を設計していくことで、空間が「身体の移動や知覚の変化と和解し、矛盾することがなくなるのである。」



「ふと佇む場所」
ヘルツベルハー

「ふとたたずめる場所」とは形式的なレベルから日常生活の営まれている場所への視点の転換を意味しているとし、「明快な機能というのでは取られられない余白部分を意味している」としている。



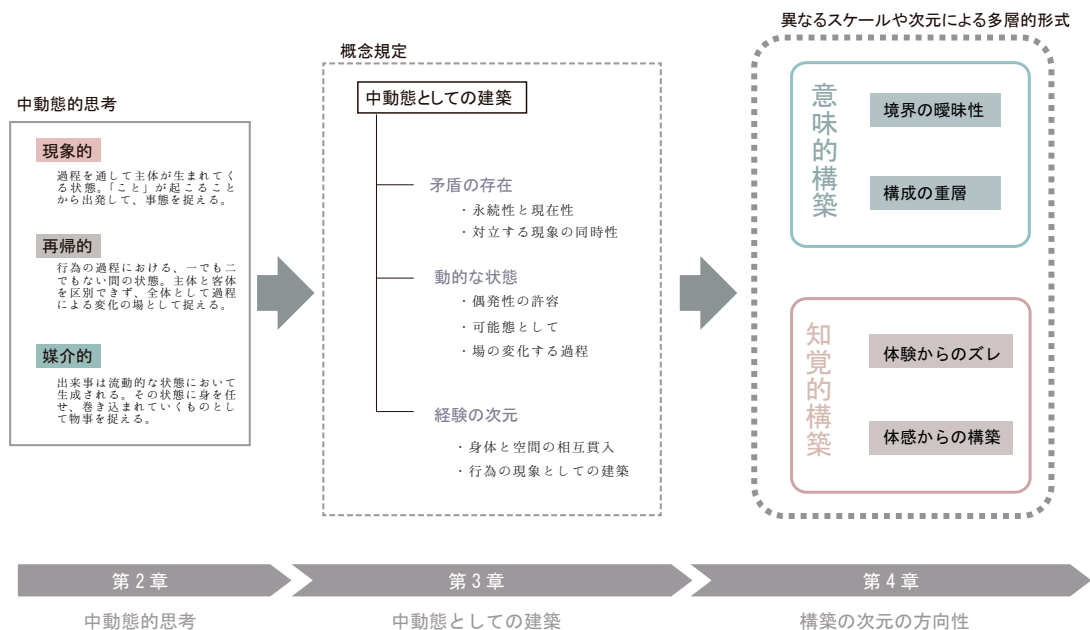
「小さな風景」
乾久美子

「人が反応し、つい関わってしまうような構造を内在化させること」で使い手と環境が一体となるとし、「その構造的な構築にこそ、建築が果たすべき役割」であると述べている。

章結

本章では建築家による、中動態としての建築を設計するうえでの構成手法を取り上げ、分析した。アプローチの方向性の違いから2方向を整理し、設計をするメル上でのキーワードを抽出した。それぞれの手法が独立して存在する訳ではなく、両方の方向を行ったり来たりすることで、中動態としての建築が目指せるのではないかと考える。

次章では、実際の建築に見られる操作との関係性を考察し、具体的な手法へと落とし込む。



4-4 キーワードの関係性

第 5 章 建築的操作の分析

第5章 建築的操作の分析

5.1 分析対象の抽出

5.2 境界の曖昧化

断片の緊張関係 / 形式の揺らぎ

5.3 構成の重層

強弱の調整 / 身体・架構スケールの共存

5.4 経験からのズレ

静寂の創出 / 連続性と違和感

5.5 経験からの構築

移動に対するメリハリ / 小さな構築

章結

5.1 分析対象の抽出

第5章では、前章で考察の対象とした建築家から、作品に対する中動態としての建築を目指した言説が見られた建築作品を選定し、分析対象とした。これらの対象から理論を実現するための手法を抽出し、考察する。

表1 分析対象

No	事例名	竣工年	設計者
1	Orphanage	1955-1960	Aldo van Eyck
2	Sculpture Pavilion	1962	
3	Schmela House and Gallery	1967-1971	
4	Delft Montessori School	1977-1981	Herman Hertzberger
5	De Drie Hoven, residential building for elderly people	1964-1974	
6	デグラードの噴水	1965	Aldo Rossi
7	ガララテーゼの集合住宅	1967-74	
8	ボルゴリッコの新市庁舎	1988	
9	ラ・ヴィレット公園	1982	Bernard Tschumi
10	コロンビア大学ターナー学生センター	1997	
11	末田美術館	1981	原広司
12	田崎美術館	1986	
13	虔十公園林フォリストハウス	1986	
14	ヘルシンキ現代美術館	2008	Steven Holl
15	ヘルニング美術館	2009	
16	東工大蔵前会館	2009	坂本一成
17	宇土市立網津小学校	2009	
18	馬見原橋	1995	青木淳
19	三次市市民ホール	2015	
20	大宮前体育館	2014	
21	七ヶ浜町立七ヶ浜中学校	2018	乾久美子
22	延岡市駅前複合施設	2018	
23	釜石市立唐丹小学校/中学校/児童館	2019	平田晃久
24	sarugaku	2007	

5.2 境界の曖昧化

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

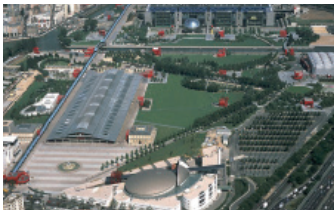
断片の緊張関係

要素をヒエラルキーなく並列することにより、緊張関係を作り、何かが起こりうる動的な平衡状態を作り出している。



末田美術館

・複数のレイヤーが合わさることで複数の事象の並列を生み、この場で生成され離散的に配置された作品群というレイヤーが合わさり、構成を攪乱させ曖昧なおおらかな空間を生む



Parc de la Villett

・「フォリー」が離れて点在することで衝突の関係が生まれ、全体性を拒否する。
・プログラムの組み合わせによる、それぞれの複雑化と相互の差異化



Parc de la Villett

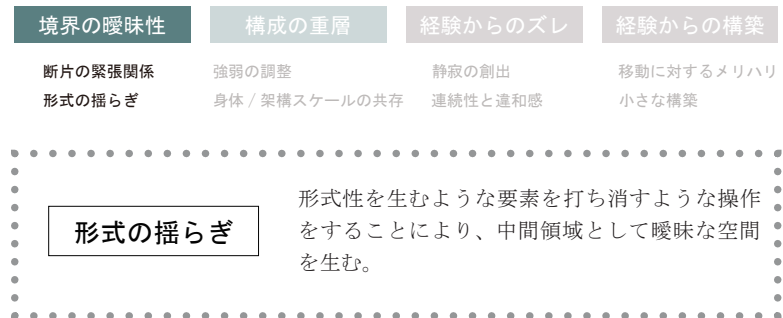
・形態の無意味性
・機能と空間の衝突によって活動を生む



ボルゴリッコの新庁舎

・街に存在する断片の集積、「統合・合体が未解決のまま放置されている現象」という切り離された様相。

5.2 境界の曖昧化



大宮前体育館

- ・面取りされた柱による弱い全体性（くくり）
- ・階ごとの色分けによる区切り



Sculpture Pavilion

- ・複数の「輪郭」による空間の構成
- ・同一の形態スケールを変えながらを反復することで連続性と差異のリズムを生み出している。



コロンビア大学学生センター

- ・動き自体が建物内の主要な活動の存在にな移動理、イベントの場となる。

5.3 構成の重層

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

強弱の調停

形式として強いものに対して、別の形式を同時に用い、それらを中和させるのではなく、同時に存在しつつ打ち消しあうことで全体性があり、それで内容な状態を作っている。



Orphanage

- ・柱、スキップフロアによる〈対現象〉の重層化
- ・グリットの反復を弱めるための円柱という強い形体、その強い円柱をぼかすための様々な操作



大宮前体育館

- ・体育館という大きなスケールの構築物に対して、周辺の住宅スケールに合わせて分割されたガラス面により緩和



唐丹小中学校 / 児童館

- ・地形に対する強い存在である土木的構築物に対する応答
- ・いかにその斜面地を人の居場所にするかという明確な目的において、バラバラな小さな計画群を結びつけていく

5.3 構成の重層

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

身体/架構スケールの共存

オーバースケールの空間がただの空白としてではなく、身体の延長の余白として存在するようになる。人に媚びすぎない身体が漂うような状態を作り出す。



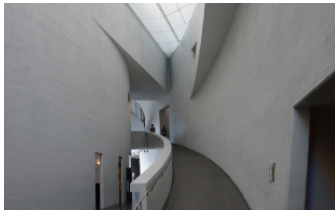
東工大蔵前会館

・都市的なスケールのプラザに対し、円柱の乱立によって身体スケールを同居させる。



三次市民ホール きりり

・浸水対策のため生まれた高さ5mの駐車場のピロティに対し、面の色の切り替えなどの操作により生活の延長としての余白となる。



ヘルシンキ現代美術館

・中間的なスケールを除くことによる、静けさの創出。ディテールによる印象を際立たせる。

5.4 経験からのズレ

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

静寂の創出

単純な形態の反復などにより、もともと持っていた形態の意味が薄れ非日常的な状態を作り、非日常と日常が重なり合うことで、空間に溶け込むような感覚を生む。



セグラテの噴水

- ・バラバラな幾何学の組み合わせによる緊張感
- ・円柱同士のスケール操作による複数の虚の距離の創出



ガララテーゼの集合住宅

- ・ミラノの城壁等の楼や回廊といった歴史的建造物からのありきたりなものの拡大解釈。(スケールの差異)
- ・壁柱250mmの反復によるスケールの違和感



田崎美術館

- ・中庭に壊れたような形状のガラス壁を設けることで、ガラスの多層性が生み出す効果。ガラス面への映り込みを計画することで、実像と虚像の重ね合わせを起こす

5.4 経験からのズレ

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

連続性と違和感

単純な形態の反復が要所でズレたり別のルールを挿入することで、そこに隙が生まれることでちょっとした違和感が生み、日常的な経験に変化を与える



馬見原橋

- ・そこを歩く、車で走るという交通の体験というひとつづき「くぐり」に逆らわず、その場所を変異させる
- ・歩道が少し広いため、道でありながら閉鎖的ではないテラスのような半屋外空間を生む。



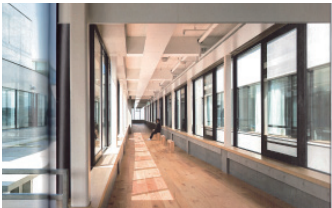
東工大蔵前会館

- ・住宅スケールよりも低い天井高を採用することで、様々なスケールの重層を可能にする。



宇土市立網津小学校

- ・幾何学的な形式によって構成を明確にしつつ、局所的に場所の条件と重ねて変異させる。



三次市民ホール きりり

- ・オーバースケールな回廊により、移動空間以外の使われ方を誘発

5.5 経験からの構築

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築

移動に対するメリハリ

エントランスや階段などの空間体験の節目となるような場所に場面の転換を生むような視点の変化をうむ操作



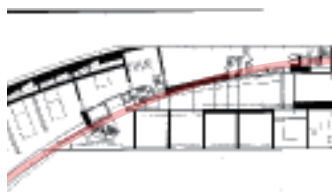
三次市民ホール きりり

- ・動きのあるエントランスの階段部を独立させ、経験としての建築の始まりと終わりを強調



ヘルニング美術館

- ・外部空間の経験の連続体として
- ・天井のむくりにより、空間の連続性を生む



ヘルシンキ現代美術館

- ・曲線的な動線空間により、スケールの異なる空間が生まれ、非対称的な経験を生む



延岡駅前複合施設

- ・駅の機能と市民の居場所というずれを許容するおおらかな単純な骨格
- ・動線や階段などにおけるスラブの種類の切り替え



ヘルニング美術館

- ・直線的な展示室の空間に対して、緩やかな輪郭により、ランドスケープとのシーンの連続性をうむ

5.5 経験からの構築

境界の曖昧性	構成の重層	経験からのズレ	経験からの構築
断片の緊張関係 形式の揺らぎ	強弱の調整 身体 / 架構スケールの共存	静寂の創出 連続性と違和感	移動に対するメリハリ 小さな構築
<div><div>小さな構築</div><div>身体スケールの操作を積み上げていくことで一種の全体性を生んでいる。</div></div>			



七ヶ浜中学校

- ・「リトルスペース」と呼ばれる大小、内外様々に展開。利用者が場所に応じて必要な使われ方を選択。
- ・表面積が増え、リトルスペースの外側にも多様な空間が生まれる



アポロスクール

- ・柱の基壇を少し大きくし、ふと座れる場所として設計する。ふとした場所の創出。



セントラル・ビヒーア・オフィスビル

- ・比較的小さく設計することではみ出しを誘う
- ・柱の出っ張りや腰壁などの障りの要素を複数配置

章結

本章では前章までに整理した中動態としての建築を目指した構築手法から、実際の建築に見られる操作を分析した。それらの類似性からキーワードを抽出し、中動態としての建築を設計する上での手がかりを整理できた。

これらの建築作品はあくまで建築家の作品への言説からの抽出であるため、実際にどう使われているか、どういった体験がなされているかの考察は行っていない。しかし、知覚的構築においてはそれぞれの建築家による空間体験やフィールドワークからの導きであるため、知覚的な部分は考慮できているのではないかと考える。

意味的構築

境界の曖昧性

断片の緊張関係



衝突の関係性 事象の並列 形態の無意味性 断片の集積と放置

形式の揺らぎ



輪郭の重ね合わせ 全体性未満 イベントとしての移動

構成の同時性

強弱の調整



形式の打ち消し スケールの調停 土本的スケールを包める

身体 / 架構スケールの共存



スケールの共存 オーバースケール 中間的スケールの除去

知覚的構築

経験からのズレ

静寂の創出



反復による意味の喪失 虚の距離 虚像と実像の重畳

ちょっとした変異



住宅よりも低い天井高 日常からの変異 幾何学的な反復とズレ ちよつと広い廊下

経験からの構築

移動に対するメリハリ



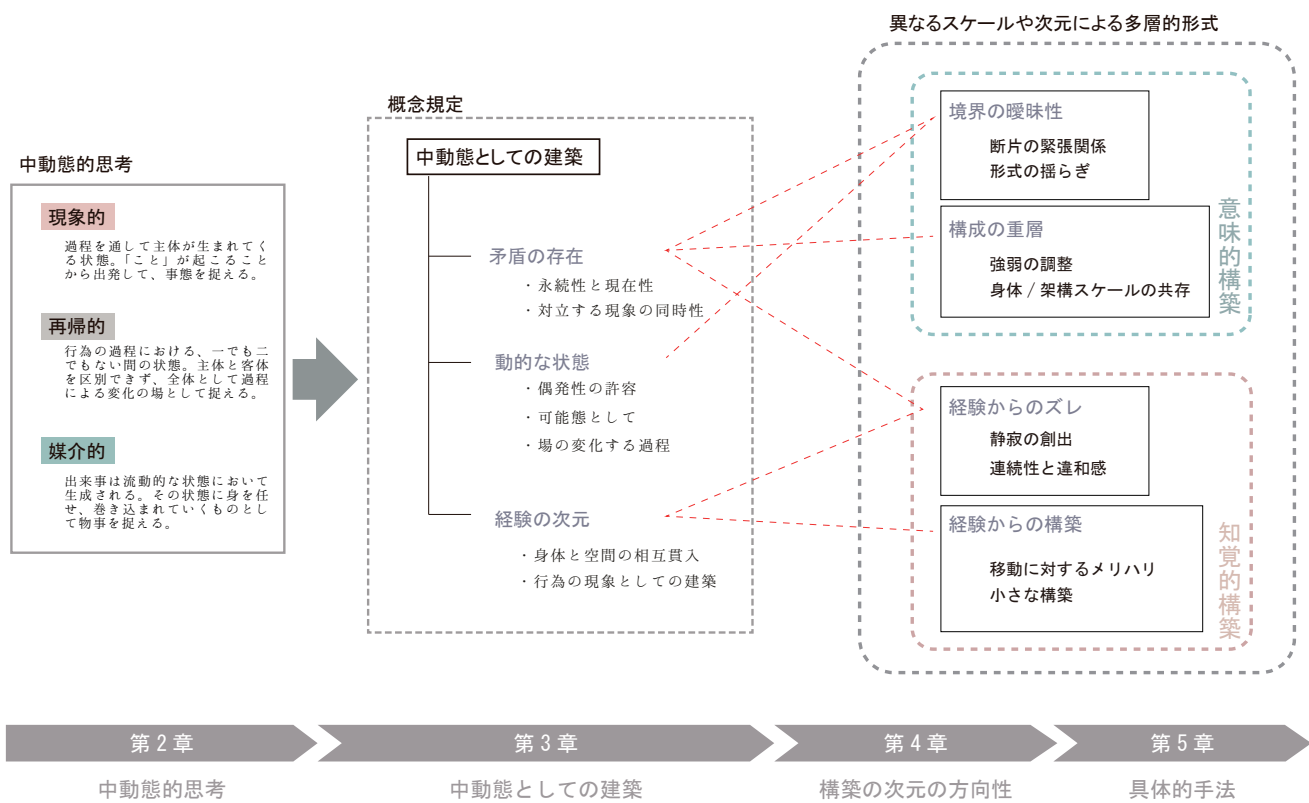
エントランスの独立性 単純な性格 曲線的な動線 天井のむくみ 曲線と直線の隙間

小さな構築



ふとした場所 小ささによるはみ出し リトルスペース

4・5 章を通して中動態としての建築を実現するため手法を、構築段階と実際の構築物に見られる操作を段階的に分析をした。
これまでのキーワードの関係性をまとめた。



5-1 中動態としての建築の設計するためのキーワードのフロー図

第 6 章 設計提案

第6章 設計提案

6.1 敷地

6.1.1 生きられた空間としてのニュータウン

6.1.2 計画都市の空白

6.1.3 ニュータウンとヤギ

6.2 設計プロセス

6.2.1 立体駐車場の再解釈

6.2.2 構成要素の重層

6.2.3 動線の延長

6.2.4 無根拠な断片の挿入

6.3 提案

本章では「中動態としての建築」の概念と手法の考察を踏まえ、具体的な設計提案を行う。



6.1 敷地

6.1.1 ニュータウンと中動態

篠原はニュータウンを〈現実感の薄い〉合理的に計画された空間と定義し、整備から時が経ちオールドタウンと揶揄されるように荒廃が進みつつある現状に、人々が入り込む余地を見出している。

これは能動的な空間であるニュータウンにおいて、人々が受動的に生活していたと置き換えることができ、荒廃しつつある現在において、人々の身体的な関わりにおいて生成していくような中動的な余地が生まれていると言えるのではないだろうか。



「ニュータウンとは、自己完結化を志向するツリー状の空間秩序に基づき、物事が整序され、予期可能なものとして馴致される、という環境的な特徴を有する。その特徴が、〈現実感のなさ〉を生み出している。ただし、それが異物であることは、人口増加による成長が止まり、ニュータウンが放擲され、〈荒廃〉が進む中で、顕在化しつつある。」

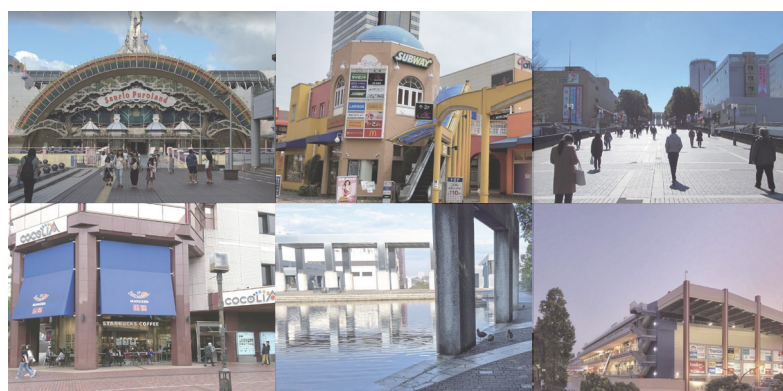
「生きられたニュータウン 未来空間の哲学」 篠原雅武 2015

6.1.2 計画都市の空白

敷地は多摩センター駅にある現在は駐車場として利用されている場所である。多摩センターは歩車分離によって歩道が整備され、計画的に商業施設、アミューズメントパーク、公園などが配置されている。歩車が分離された状態において、歩道レベルの構築物がない現状の敷地は、その一角において穴のような空白となっている。



6-1 敷地図



6-2 点在する断片

6.1.3 ニュータウンとヤギ

現在、駐車場と歩道の法面において4-11月にかけてヤギによる除草が行われている。これらのヤギは、除草という目的的に導入されているという面と、動物自体を理解することのできない他者としての面という両義性を持っている。

このニュータウンにヤギが入り込んでいるという風景は、計画的なニュータウンと機能的な駐車場などと合間って、不思議な風景を生み出し、日常に揺らぎを与えている。

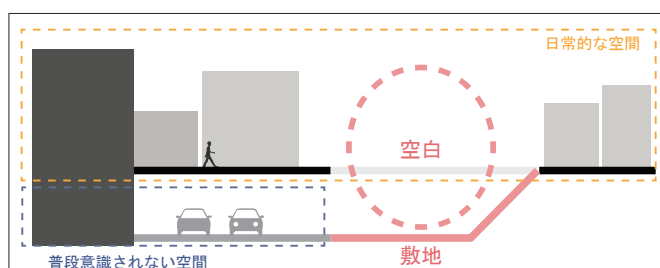


6-2 敷地にいるヤギ

6.2 設計提案

立体駐車場とヤギ牧場の複合建築の提案を行う。機能的な駐車場という要素と、機能的な面だけでは捉えられないヤギという要素を複合させ、使用者と建築との新たな応答性を持った中動態としての建築とすることで、様々な要素を許容する新たな場を創出する。中動態としての建築がこの場所を変容させるきっかけとなる。

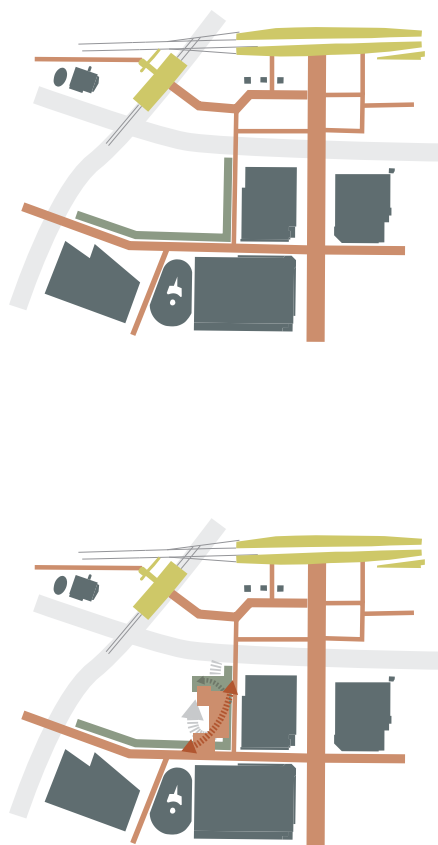
まず、既存の駐車場の駐車台数を担保した立体駐車場を想定した上で、駐車場という機能的かつ、土木的なスケールの構築物を、前章まで整理した手法を生かし、中動態としての建築にしていく。



6-3 空白から余白へ

6.2.1 駐車場の再解釈

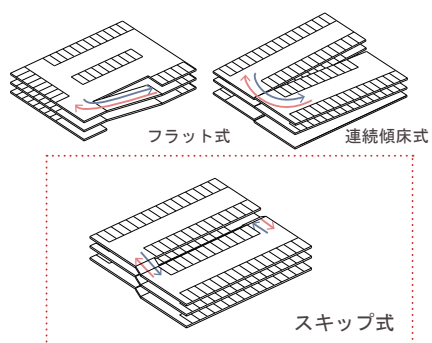
ニュータウンにおける立体駐車場を中動態として考える。ただ車を停める機能としてのみで捉えるのではなく、地下と地上を結ぶ動的な場として捉えられるのではないだろうか。敷地においてそれぞれを延長させるように交差させていく。駐車場という閉じられた機能を動的な場としていく。



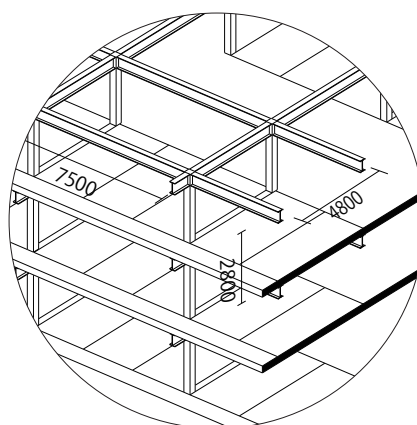
6-4 動的な場

6.2.2

敷地における駐車台数の効率性より立体駐車場の形式を決定。鉄骨フレームは基本的な寸法を参考に決定。立体駐車場を普通に作った上で、その構成に対して複数の操作を行っていく。



6-5 形式の選定

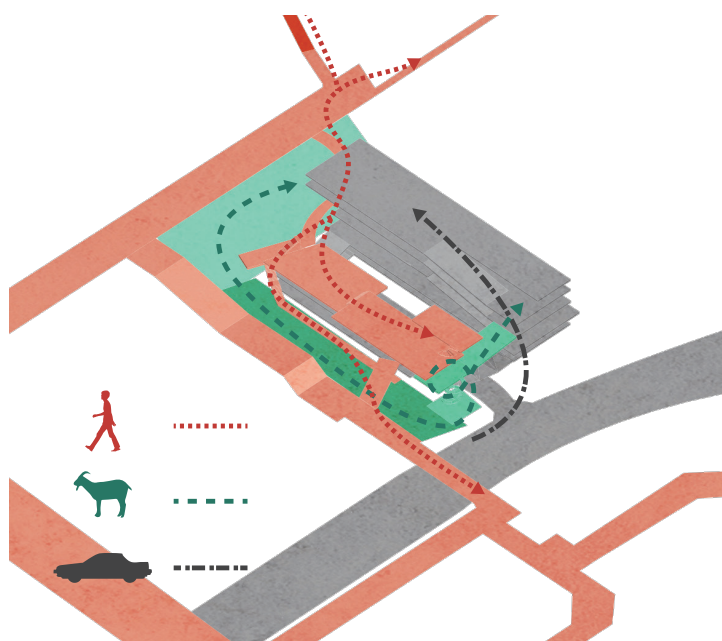


構造をコスト面、スキップフロアの操作の柔軟性から鉄骨造とし駐車場の基本グリッドを4800×7500とした。

6-6 基本寸法

6.2.3 動線の延長

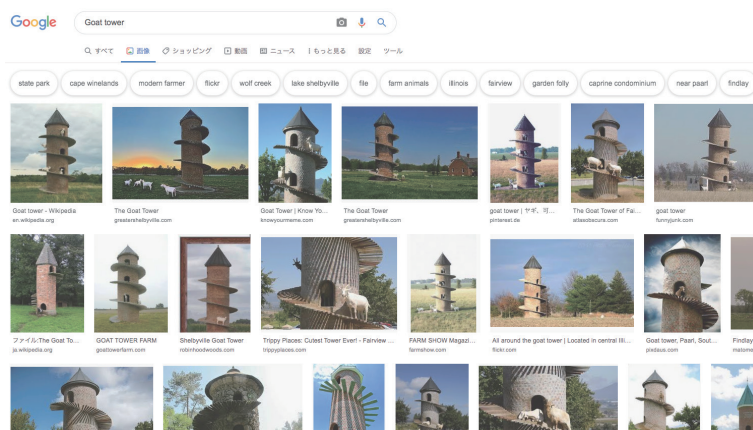
設計における共通目標として「動線の延長」を設定する。立体的に各要素が混在する空間とし、部分の固有性を保ちながら、部分の領域を超えて関係が重層した全体を構築する。



6-7 各動線の延長

6.2.4 無根拠な断片の挿入

様々な要素を許容する“動的な状態”を作る操作の一つとして、ヤギの上に登るという習性と立体駐車場の構成の類似性から「ヤギの塔」を引き入れる。ヤギの塔という立体駐車場やニュータウンにとって無意味な造形を取り入れることで、違和感を与えつつ、ヤギの登るという習性と車、人が登っていく行為が呼応しあい、それぞれの要素を加速させていく。

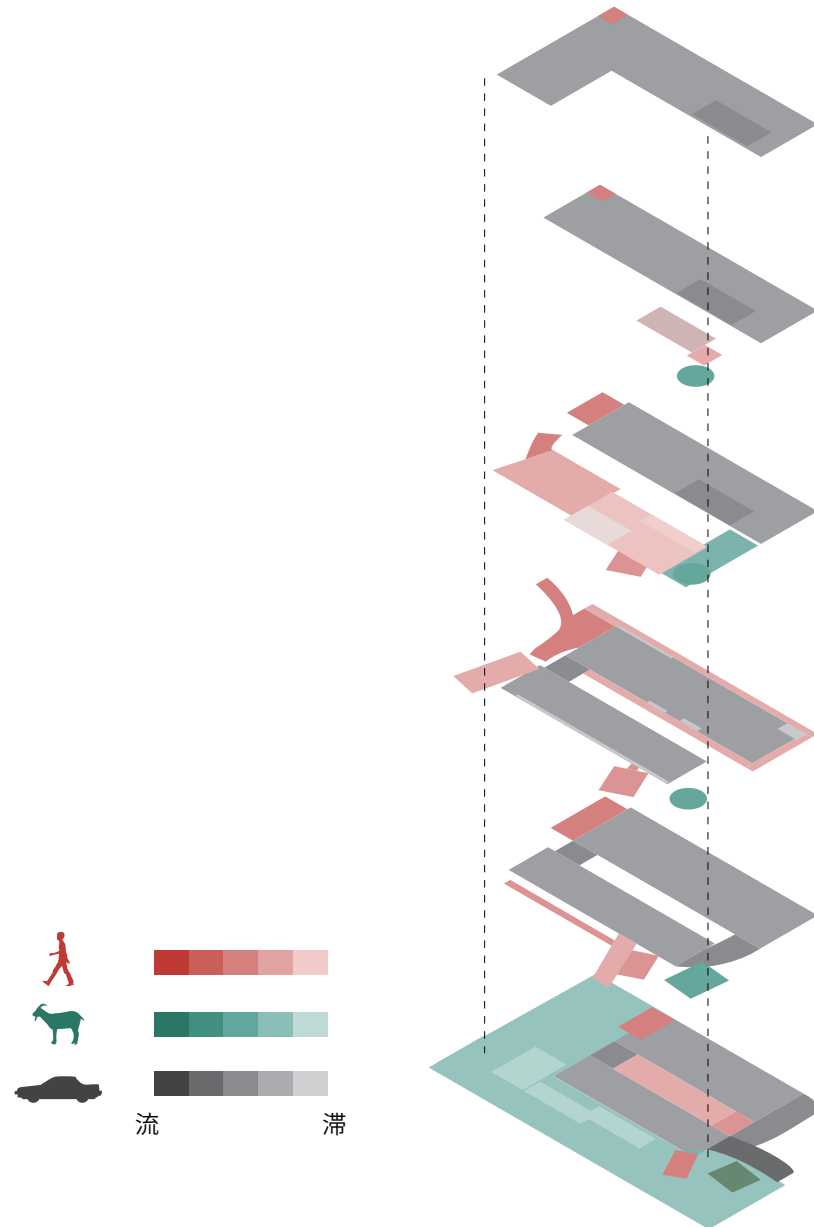


「ヤギの塔」とはフォリーを模して装飾されたヤギ小屋である。このフォリーと呼ばれる小型の建築物の最初の例は 19 世紀のボルトガルに見られる。有名なヤギの塔として、南アフリカのヤギの塔でフェアビューというワイナリーに 20 世紀に建築されたものが挙げられる。このヤギの塔に影響を受け、さまざまな複製が世界中に広まっていった。(wikipedia)

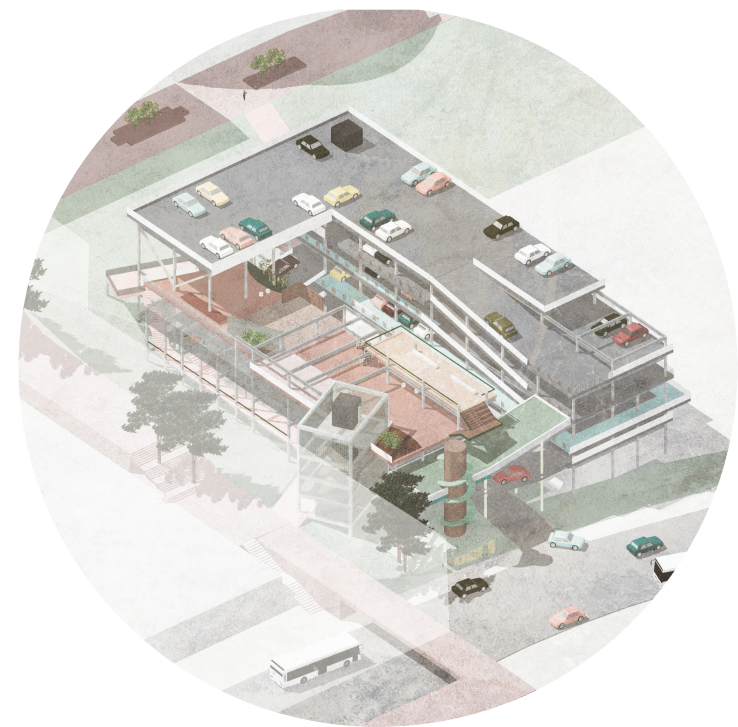
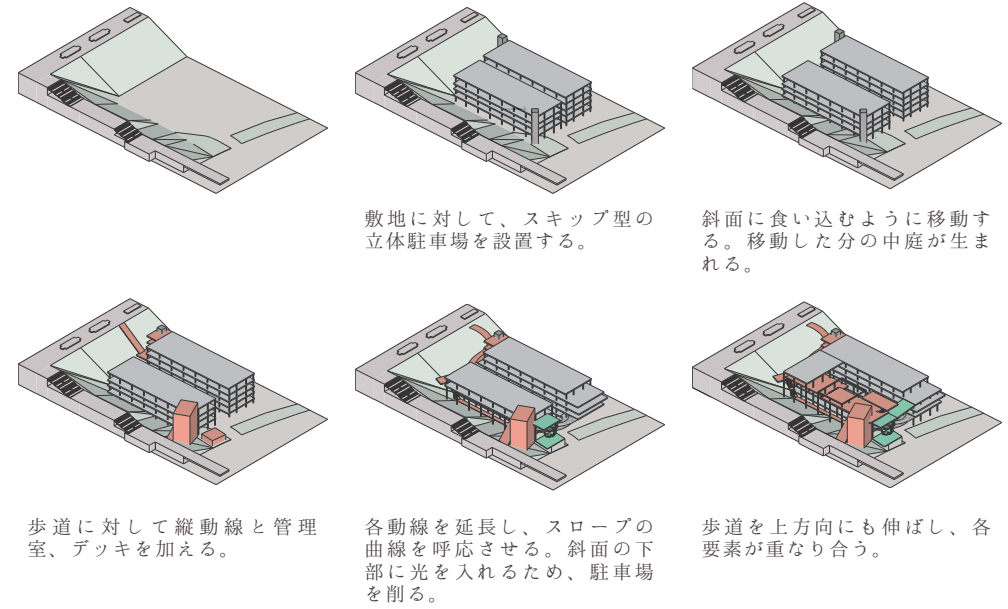
6-8 ヤギの塔について

●行為の速度の混在

人、ヤギ、車のそれぞれの移動速度が混在する。建物全体に目的的な場所を設けいないように配置し、状態としての構築を試みる。

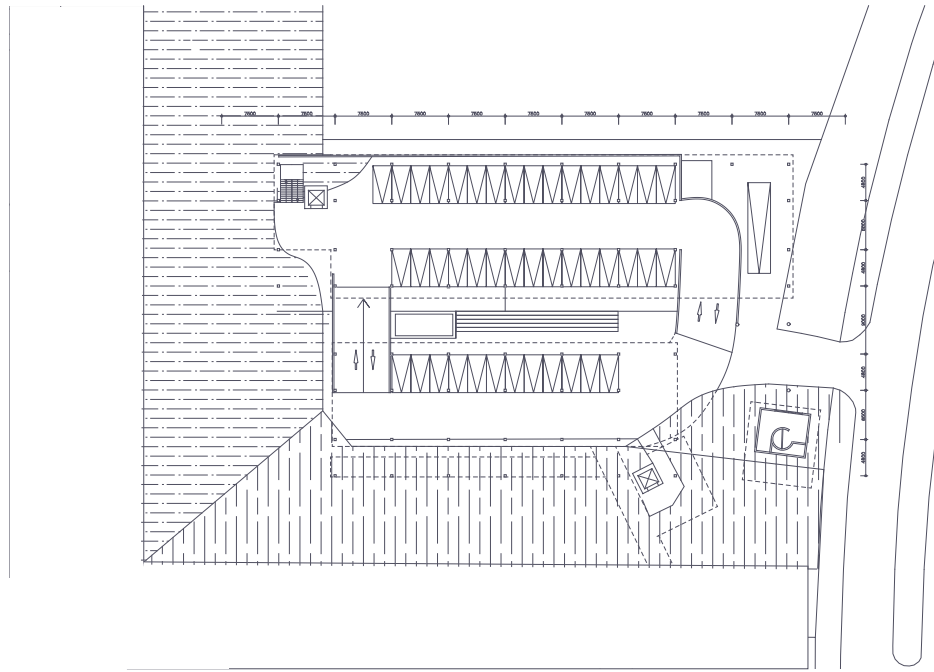


●設計プロセス

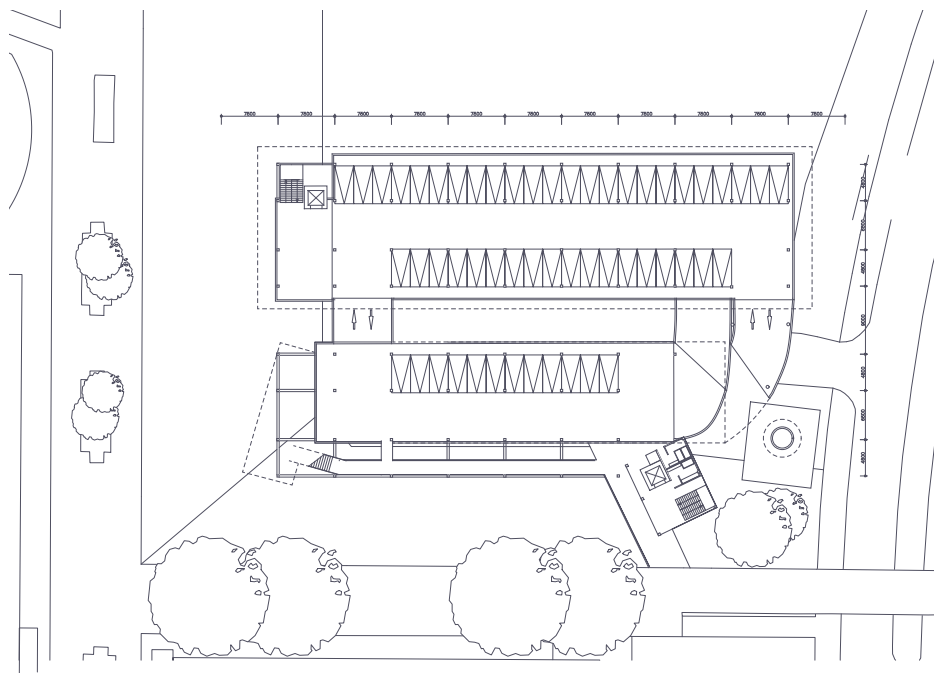




俯瞰パース

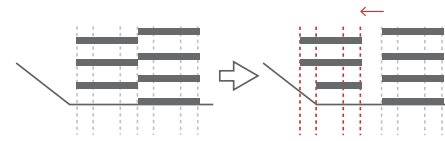


1F 平面図 S=1/1000

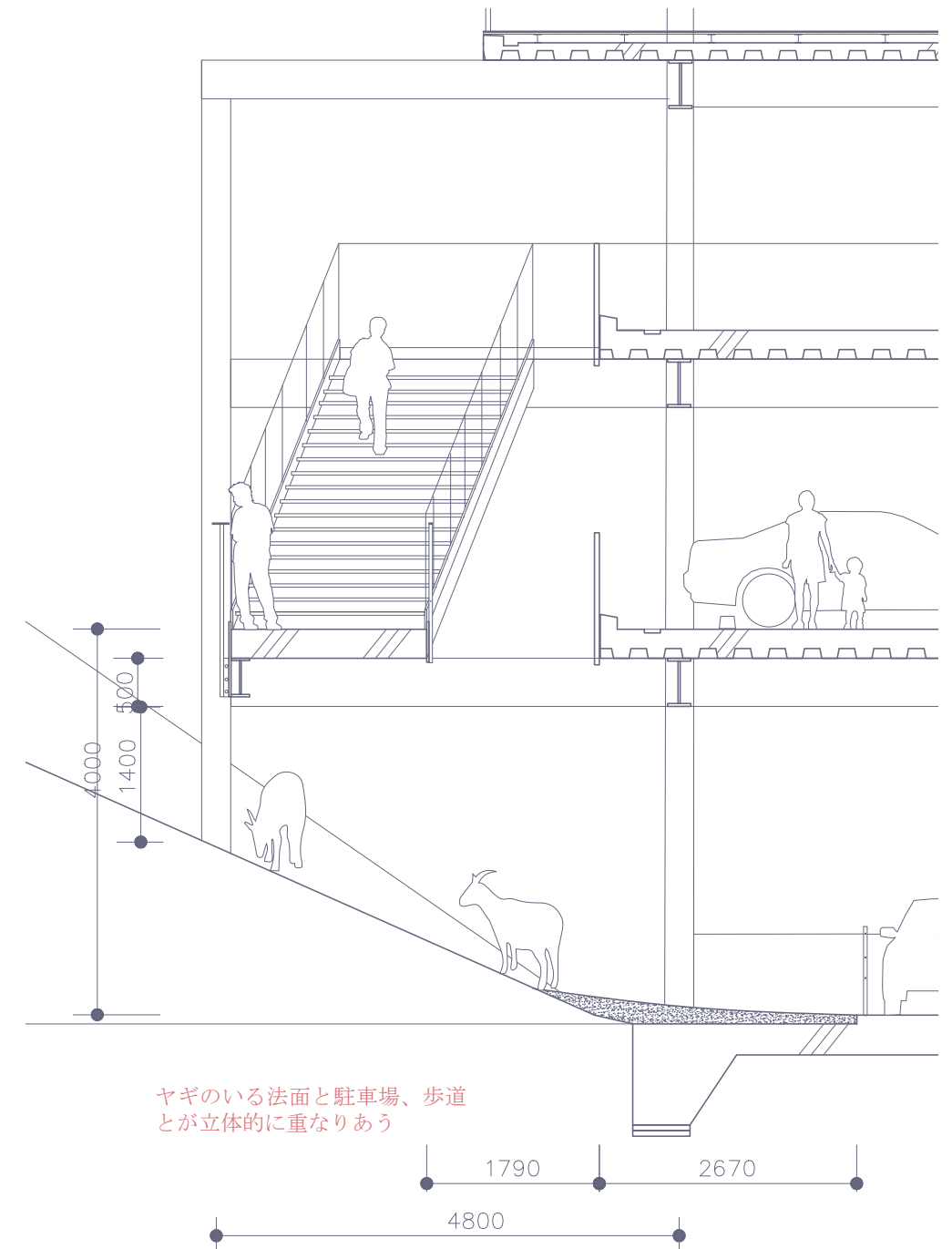


2F 平面図 S=1/1000

● 駐車場と法面の重なり



駐車場部分を片方法面に重なるようにズラす。それにより中庭が生まれる。また、法面の下部まで光が届くように駐車部分を削る。



ヤギのいる法面と駐車場、歩道とが立体的に重なりあう

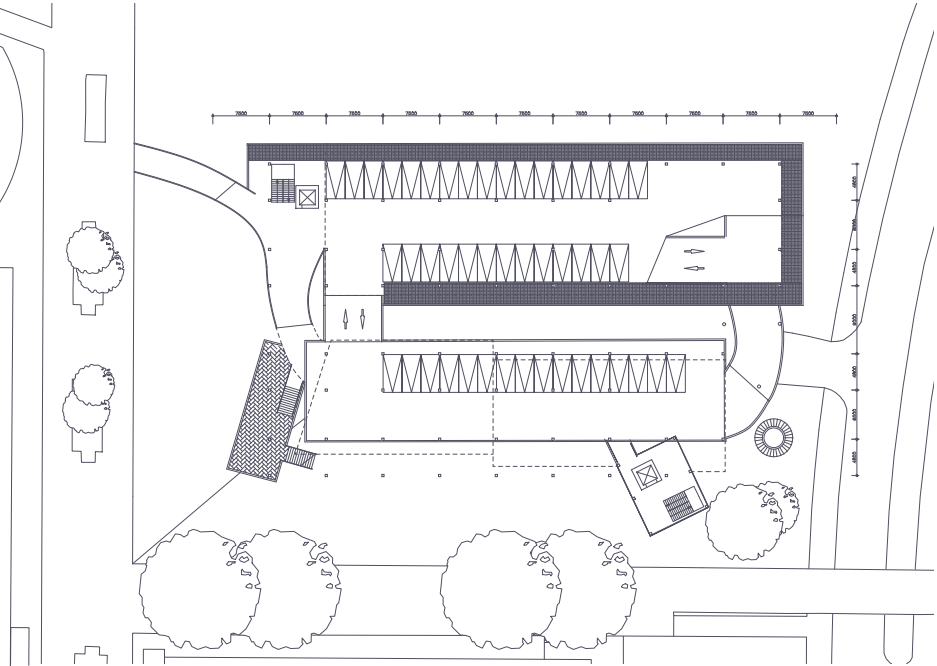
詳細断面 S=1/70



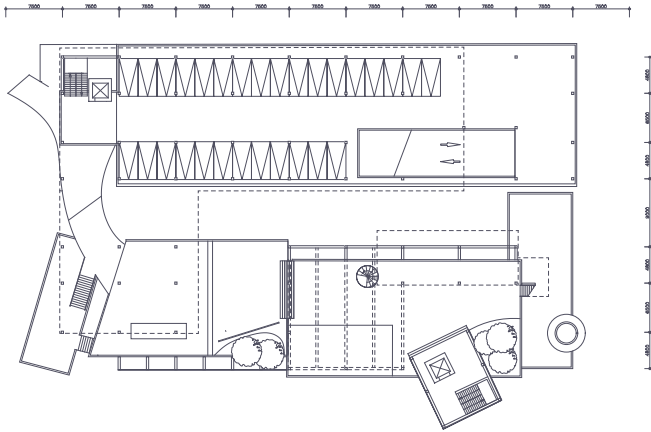
駐車場の入り口となる1F部分
立体駐車場と法面の間から光が入り、ヤギのいる法面を際立たせる。
中庭を介して奥の駐車場への視線が抜ける。



駐車場の隙間に生まれた吹き抜け
立体駐車場の吹き抜けの大空間に対して、身体スケールの階段を挿入することで、心地よい静寂を生む。



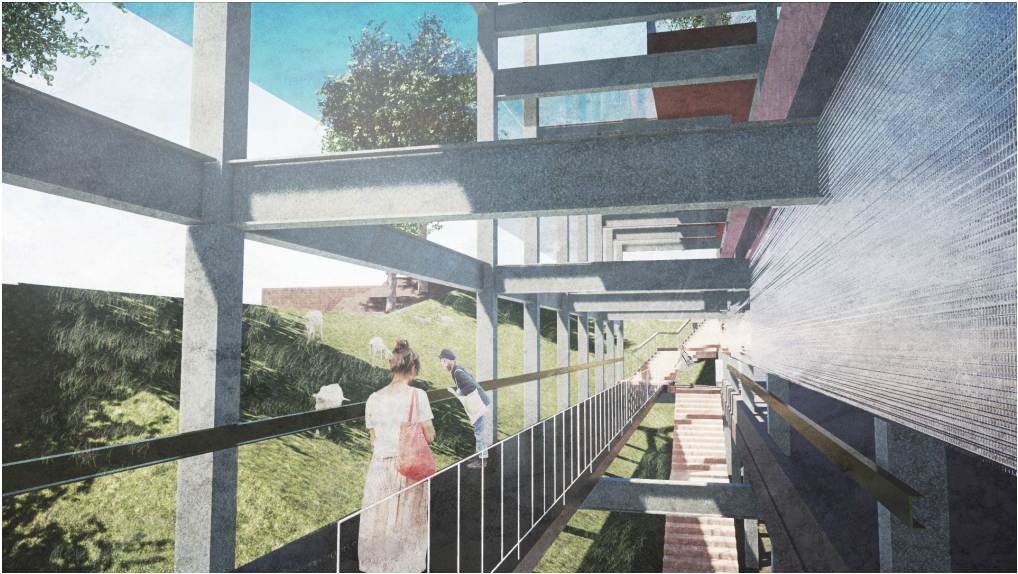
3F 平面図 S=1/1000



4F 平面図 S=1/1000



駅側から立体駐車場への入り口
構造体の隙間から様々な要素が見え隠れする。駐車場の柱より手前の縦
動線の柱の方が100mm太い。



法面と駐車場との間にある歩道
駐車場のグリッドより細かく入る柱がリズムを作る。透過度の違う外壁
が混ざること移動による体験に変化を生む。



屋上へのスロープと駅への階段の分かれ道。
ヤギのいる法面に飛び出すように踊り場があり、立体駐車場によるフレームと法面、歩道との境界を曖昧にする。



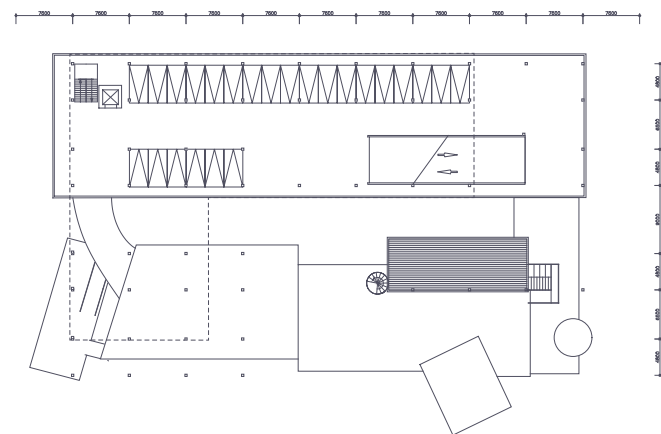
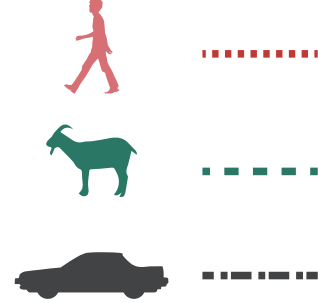
商業施設側の歩道からの眺め。
立体駐車場のおおらかな空間を貫くように歩道が伸びる。人通りの多い歩道側に大空間があることで、スケール感を調整する。



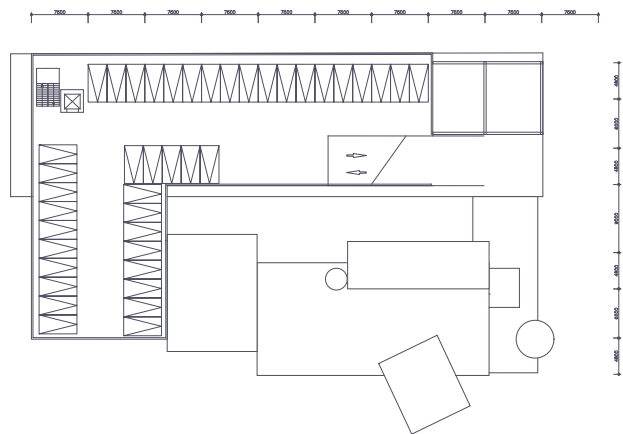
駅側の歩道からの眺め。
ヤギの塔がアイストップのように存在し、ニュータウンのもつテーマパークのような作られた遊園地のような要素と呼応する。



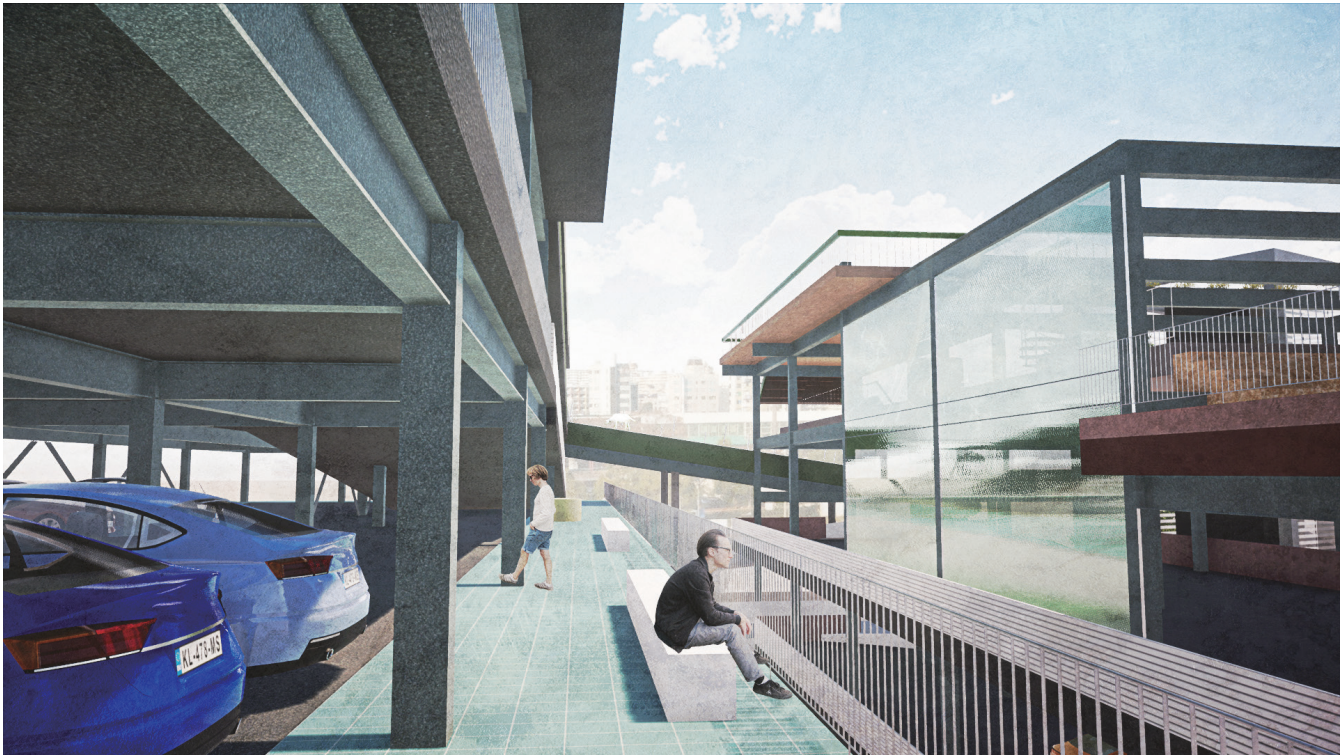
屋上デッキ
アイストップとなるヤギの塔に対し、螺旋階段、ベンチなどのスロープが呼応する。階段やフレームなどの積み重なる構成が駐車場という要素を崩す。



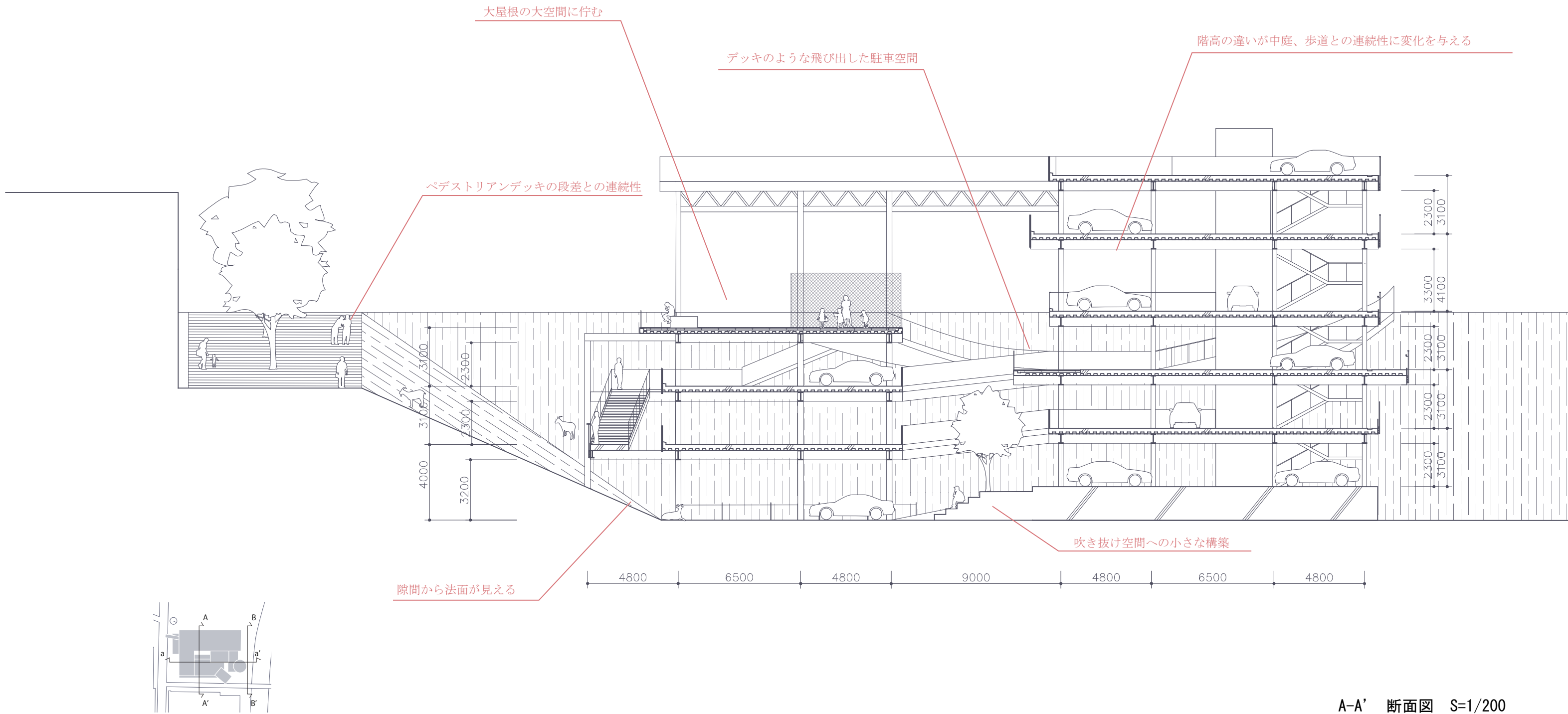
5F 平面図 S=1/1000



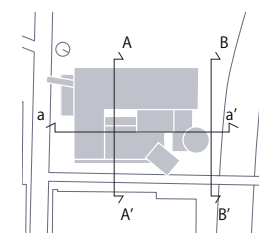
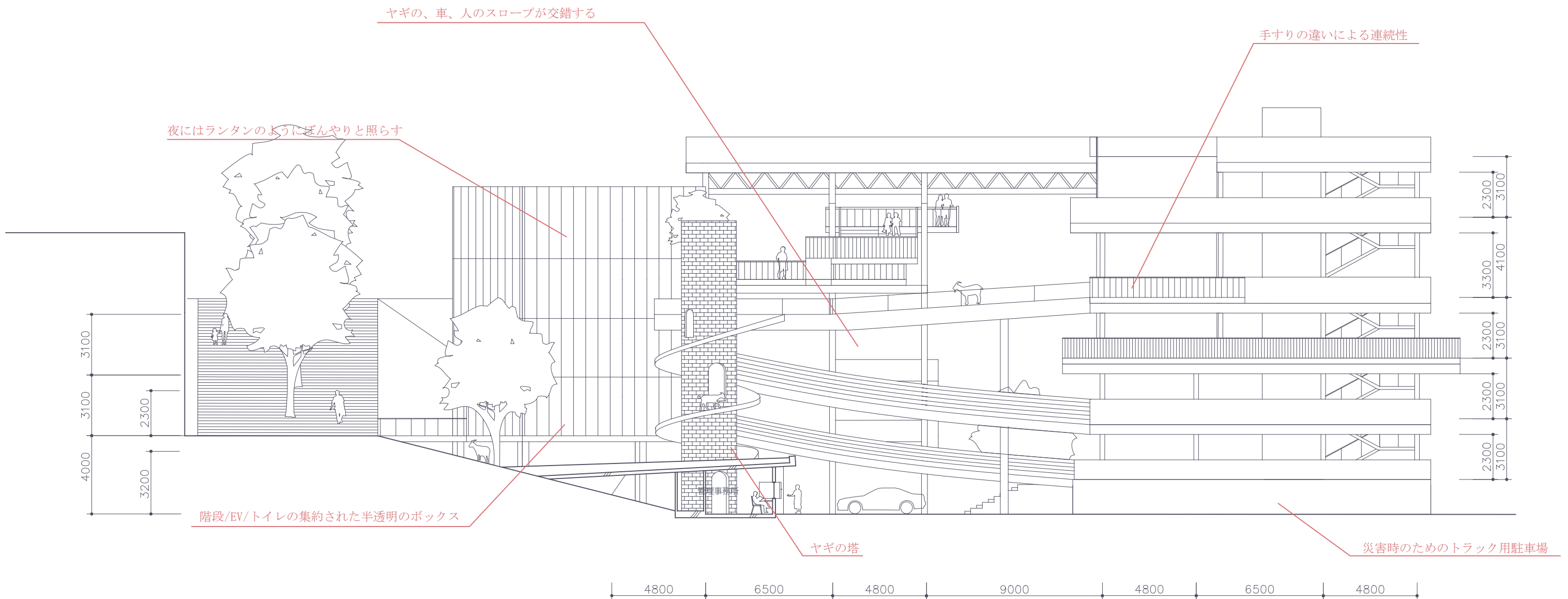
6F 平面図 S=1/1000



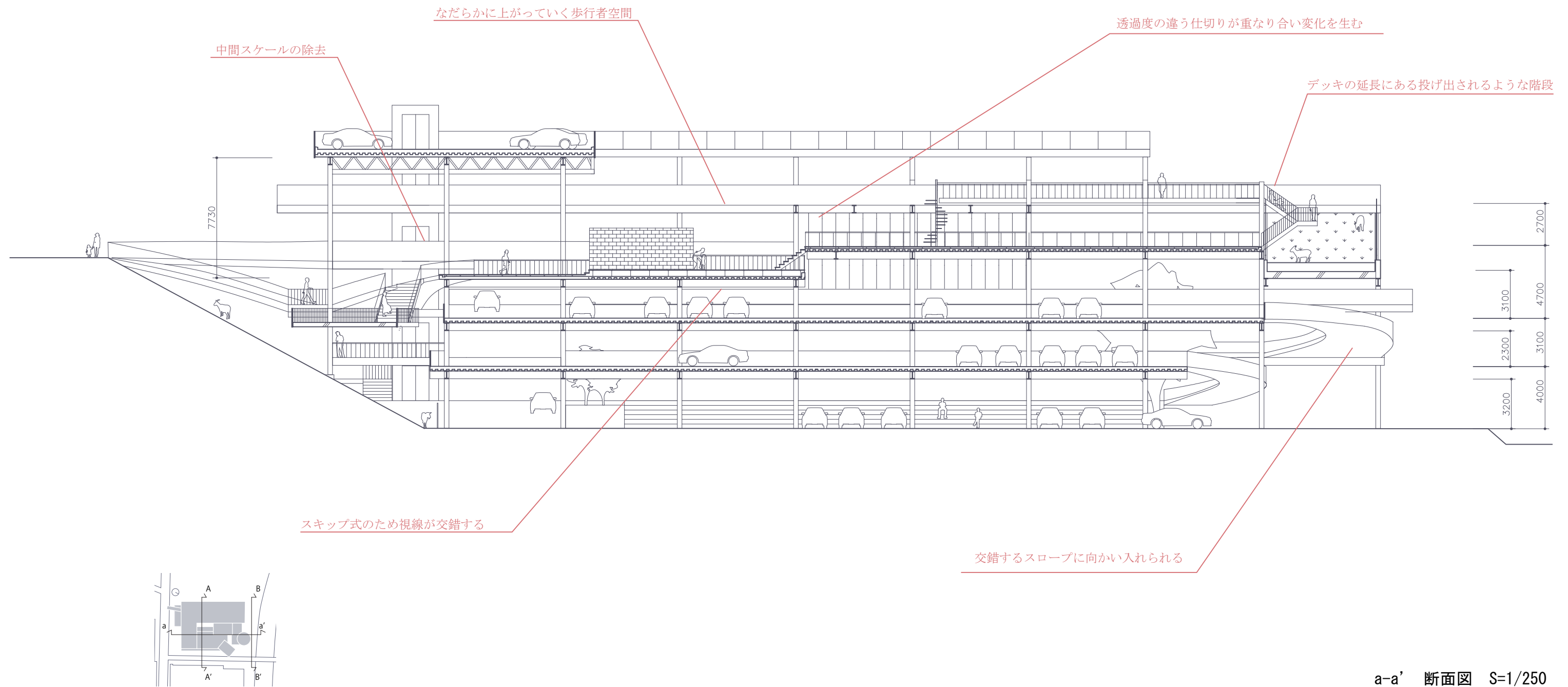
少し飛び出た駐車場部分がデッキのような空間になる。そこから複雑に絡まったスロープが垣間見え、日常からの逸脱を促す。



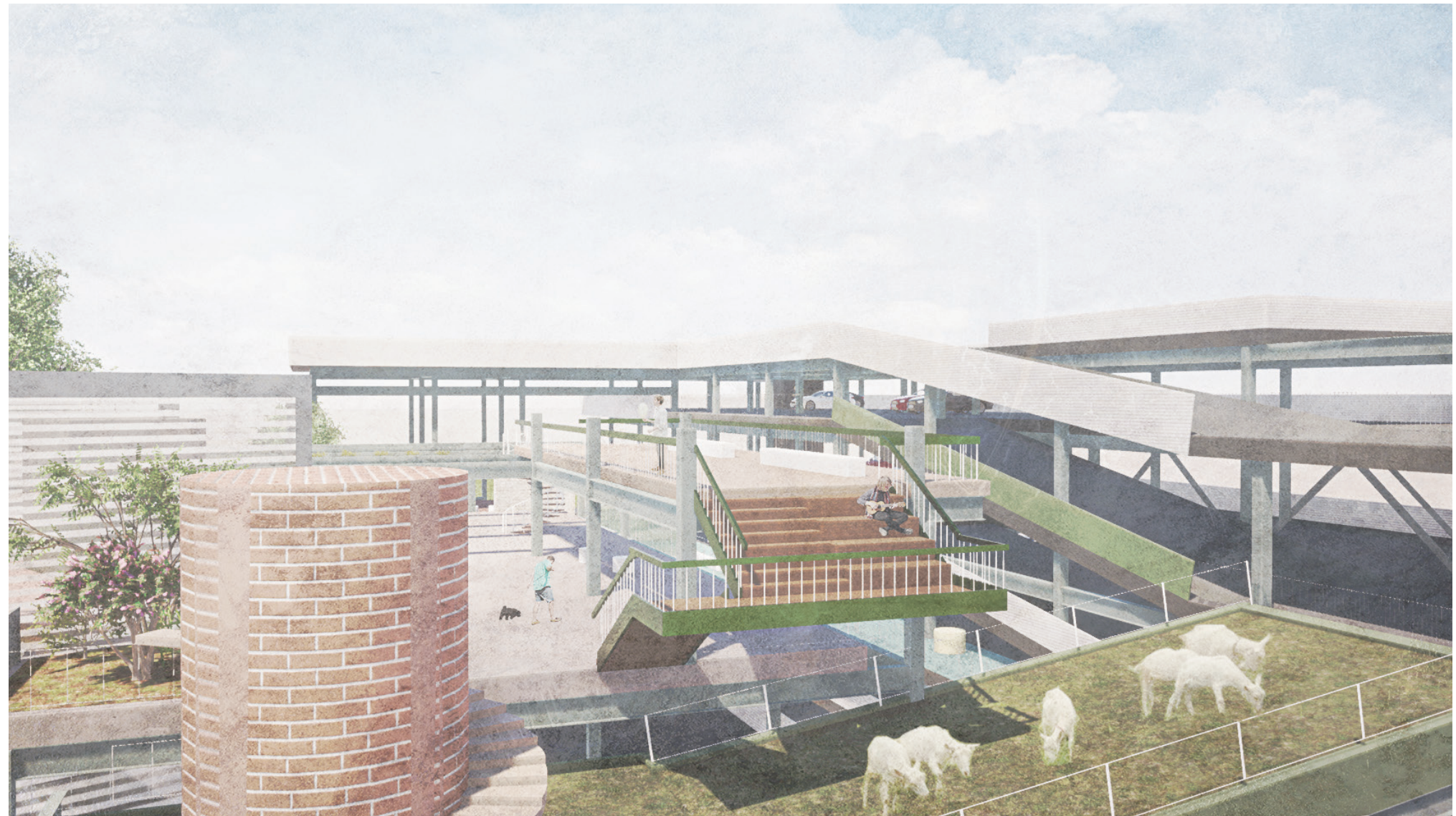
A-A' 断面図 S=1/200



B-B' 断面図 S=1/200



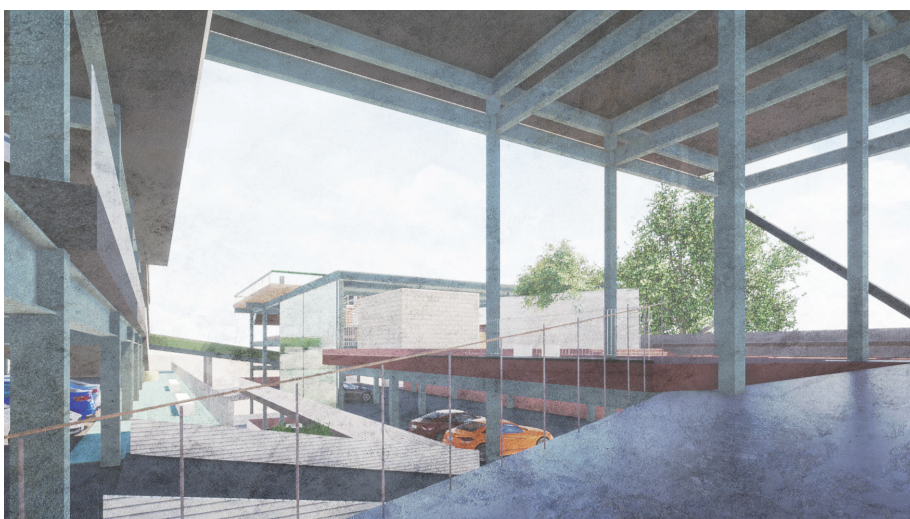
a-a' 断面図 S=1/250



屋上デッキの最端部
投げ出されるような階段がヤギのいる場所との距離を近づける。



南側の歩道とをつなぐスロープ
曲線によって緩やかに屋上へと接続する。歩道側に飛び出た駐車部分が
底となって向かい入れる。駐車場との距離感が曖昧になる。



スケールアウトした大空間
歩道から連続するスロープが大空間を貫く。駐車場、屋上の見え隠れす
る素材が視点の変化と呼応する。



駐車場中階からの眺め

駐車場4Fのカーブにおいて外壁が手すりへと変わり、前方のヤギの塔とスロープが見える。そこに重なる階段も見え、静寂と動的な状態が並列する。



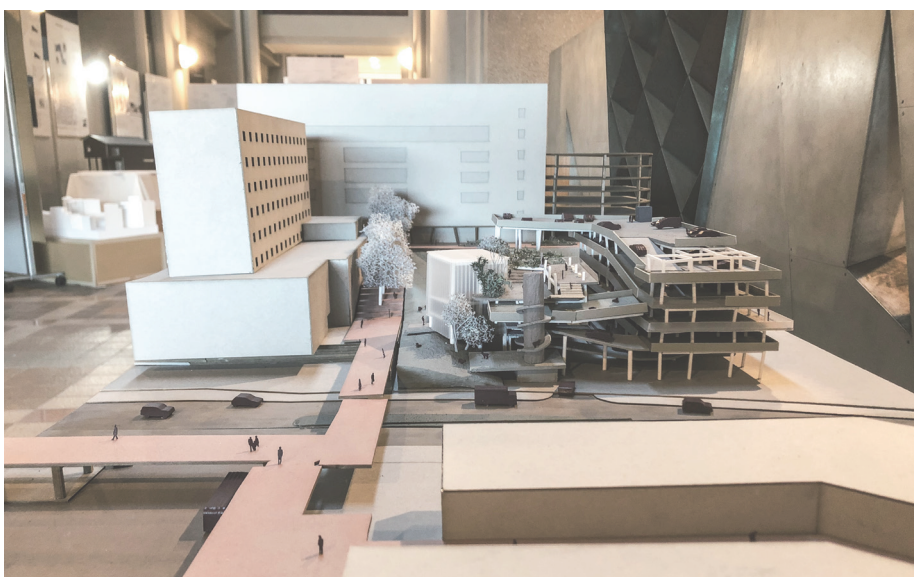
駐車場屋上からの眺め

屋上まで来てしまい駐車した場所から重なり合うスラブが見える。重なる要素、移動するヤギ、車、人などを俯瞰的に眺められる。

●模型写真



●展示風景



第7章 結章

総括と展望

概念の考察、手法の抽出、設計提案を通して中動態としての建築のあり方を整理し、設計提案において中動態という視点が使用者と建築とが相互に作用し合うような建築を実現するため手法を試みた。

今回分析対象とした建築家、及び建築作品は実際に使われているため体験や評価が可能であるが、設計提案は実際にものとして体験することができないため、中動態としての建築が実現できたかは評価しにくい。

今後の設計活動を通して、このような考えのもと設計を進めていくことで、実際の建築物において「中動態としての建築のあり方」を証明して行けたらと思う。

参考文献

書籍

- ・「芸術の中動態 - 受容と制作の基層 -」 森田亜紀 2013
- ・「中動態の世界 - 意志と責任の考古学 -」 國分功一郎 2017
- ・「線の生態人類学」 ティム・インゴルド 2018
- ・「コモナリティーズ ふるまいの生産」 アトリエ・ワン 2014
- ・「イメージの人類学」 箭内匡 2018
- ・「空間 建築 身体」 矢萩喜徳郎 2004
- ・「生きられたニュータウン」 篠原雅武 2015
- ・「曖昧の七つの型」 W. エンプソン 1974
- ・「建築の多様性と対立性」 R・ヴェンチューリ 1982
- ・「空間の経験」 イーファー・トゥアン 1993
- ・「チーム 10 の思想」 Aldo van Eyck/ 他 2008
- ・「建築に内在する言葉」 坂本一成 2011
- ・「原っぱと遊園地」 青木淳 2004
- ・「JUN AOKI COMPLETE WORK 1-3」 青木淳
- ・「アルド・ロッシ自伝」 アルド・ロッシ 1981
- ・「記憶の形象」 槇文彦 1994
- ・「建築と断絶」 ベルナール・チュミ 1994
- ・「実存・空間・建築」 ノルベルグ・シュルツ 1973
- ・「生きられた家 - 経験と象徴 -」 多木浩二 1976
- ・「GA ARCHITECT 11」 ステューヴン・ホール 1993
- ・「乾久美子建築設計事務所の仕事」 乾久美子 2019
- ・「建築する身体—人間を超えていくために」 荒川修作 / マドリン ギンズ 2008
- ・GA JAPAN 153 中間領域
- ・建築文化

論文

- ・「生命論的建築の研究 くからまりしろ」の概念をとおして」 平田晃久 2016
- ・「オートポイエーシス概念の建築的展開」 小島孜 2005
- ・「メディアとしての建築」 小島孜 2008

中動態としての建築のあり方に関する研究及び設計提案

18852514 金田駿也
指導教員 小泉雅生

第1章 序論

“中動態”とは、かつてのインド＝ヨーロッパ語の動詞体系において存在していた態の1つである。能動態における動詞の主語は動作主であり、動詞の表す過程から影響を受けないのに対し、中動態の主語は、主語でありながら、動詞の過程の中で何らかの影響を被る。つまり、私たちが現在使用している〈能動態－受動態〉という対立ではなく、〈能動態－中動態〉の対立であり、それはその動作主がその動作の過程の外側か内側であるかという対立を特徴としている。森田亜紀は『芸術の中動態』において、動作主が動作の過程に内にあるということは、動作主が「過程に巻き込まれて変化する」ことであるとしている。そこから芸術体験に関する記述より、作品を前にした際の、鑑賞者に作品世界が自ずと立ち現れてくる出来事に中動態の特徴を見ている。作品と鑑賞者を、主体と客体という図式で考えるのではなく、鑑賞するという行為によって、主体としての作品が現れてくるとしている。

このような中動態としての考えを建築に援用すると、「中動態としての建築」は、建築が能動的に使用者に行動を強いるような支配的なものではなく、ただ必要な空間だけを用意し目的のためだけに使われるような受動的なものでもない、使い手と建築とが相互的に作用し合うものであると言える。

そこで本研究では、能動でも受動でもない第三の態である中動態を考えることで、建築のあり方の新しい視点を切り開き、そして、それを設計として応用することによって、新たな建築と使い手との応答性を持った建築を提案することを目的とする。

第2章 中動態という概念

2.1 言語における中動態

現代において主流となっている〈能動態－受動態〉においては主体と客体が存在し、行為を行う／受けるの対立で分けられている。それに対し、〈能動態－中動態〉では、能動態の主語は生じている過程の外にあり、過程を支配するような動作主として存在し、中動態の主語は、動詞の表す過程に巻き込まれ、過程の中で何らかの違った状態になる（図1）。つまり、〈能動態－中動態〉の対立は〈能動態－受動態〉の対立＝『行う行為（主体）－受ける行為（客体）』の対立とは違い、主語が過程に対して『外的であるか内的であるか』の対立であるとしている。

2.2 芸術鑑賞にみる中動態

J. デューイは『経験としての芸術』（1934）において、芸術鑑賞における鑑賞者と対象との相互作用における芸術作品の魅力を見ている。森田は「芸術の中動態」において、「動作主が過程に巻き込まれて変化する」とし、芸術体験における、作品と鑑賞者を、主体と客体という図式で考えるのではなく、鑑賞するという行為によって、主体としての作品が現れてくるとしている、という経験を中動態の特徴として考察している。これは芸術を建築に置き換えても言えることではないだろうか。（図3）

論文構成

第1章 序論 1.1 背景と目的 1.2 本論の構成 第2章 中動態という概念 2.1 言語における中動態 2.2 芸術鑑賞に見られる中動態 2.3 中動態的に思考する 2.3.1 過程における主体の成立 2.3.2 変化の過程としての場 2.3.3 動的な状態として 第3章 中動態としての建築 3.1 建築を中動態として考える 3.2 諸理論との接続 3.2.1 矛盾の存在 3.2.2 転換と媒介 3.2.3 経験の次元	第4章 中動態としての建築の構築 4.1 構成手法に見られる中動態的思考 4.2 意味的構築 4.3 知覚的構築 第5章 建築的操作の分析 5.1 分析対象の抽出 5.2 境界の曖昧化 5.3 構成の重層 5.4 経験からのズレ 5.5 経験からの構築 第6章 設計提案 6.1 敷地 6.2 設計提案 第7章 総括と展望
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

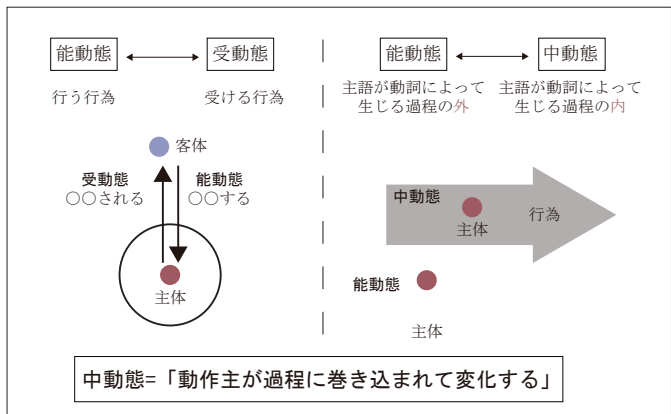


図1 能動態－中動態 / 能動態－受動態の関係

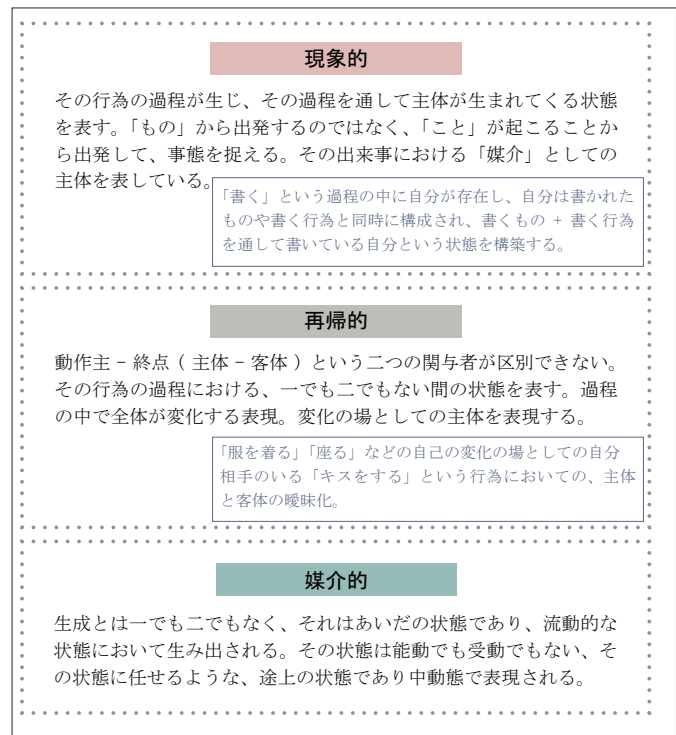


図2 思考としての中動態の抽出

2.3 中動態的に思考する

以上のような中動態で表現される行為には大まかに3種類の特徴が得られる。(図2)

2.3.1 現象的

1つ目は、その行為の主体が過程の中で成立し、過程を通じて変化していく状態である。書くという行為の過程において、「書くもの+書く行為」を通して、「書いている自分」という状態を構築するような、その出来事において全体としての主体が成立するような状態である。「もの」から出発するのではなく、「こと」が起こることから出発して、事態を捉える。

2.3.2 再帰的

2つ目は、その行為の過程において主体と客体がの区別ができない、その過程の中で全体として変化しているような状態である。「一でも二でもないあいだの状態」ととも言える。

2.3.3 媒介的

3つ目は、生成するという動的な状態としての中動態である。「調和という中程の流れのうちで人や物が生成することへと当てられるべきである、と。(…)ラインが示されるのは能動態で受動態でもなく、中動態においてである。」(「線の生態人類学」ティム・インゴルド 2018)という「あいだの状態」に焦点を当てたものである。

第3章 建築における中動態的思考

3.1 建築を中動態として考える

建築は前章であげた芸術作品とは違い、あらかじめ機能と使用者を想定して設計を行い、完成後、人々が利用するという過程が必ず存在する。その点において建築は意図せず中動態の性格を帯びてしまう。

本論では、特に中動態的な言及が見られた建築家から分析を進めていく。

3.2 諸理論との接続

前章で整理した3つの中動態的思考の方向性と、これまでの建築のあり方に関する建築家・批評家などの言説を整理し、「中動態としての建築」の性格として以下の3つに分析を行った。(図5)

3.2.1 矛盾の存在

アルドファンアイクは形態の保つ力によって人間の行為を誘発するあいまいな空間を「中間的なもの」とし、それは部分/全体、内/外、などの相互補完的な関係にある2つの現象が同時に現れる「対現象」によって生まれるとした。坂本一成は永遠性と現在性、アイデンティティと活性化なその対立と矛盾の現象として生きた建築があるとし、それは矛盾する両義性を合一化することによって作れるとしている。また、青木淳は一つの実在が様々な相の読み取りを許すには、それら様々な層を折衷させるのではなく、表裏の緊張関係に置くことが重要であるとしている。

3.2.2 転換と媒介

ベルナール・チュミはこれからの建築はイベントという「転換点」の構築の中に存在するとし、「統一された理想郷で確実性の保証を求めたいいわゆる近代主義とは違う、多重で断片化された未調停な地平を探究している。」とした。原広司は「様相論的建築」を提唱し、「それは状態の建築であり、それぞれの瞬間に、まさに変わらんとする状態が示され、それゆえ、時間の建築であり、可能態としての建築である」とした。平田晃久は、「からまりしろ」という概念を建築に提示し、建築が単体として獲得するのではなく、<からまりしろ>が他者を

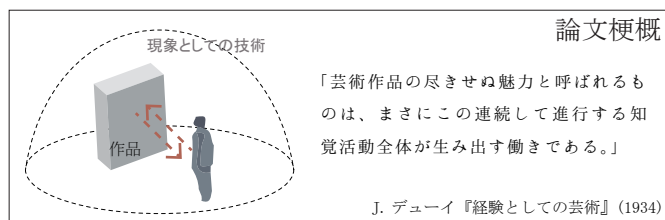


図3 芸術鑑賞にみる中動態的思考



図4 言説の整理

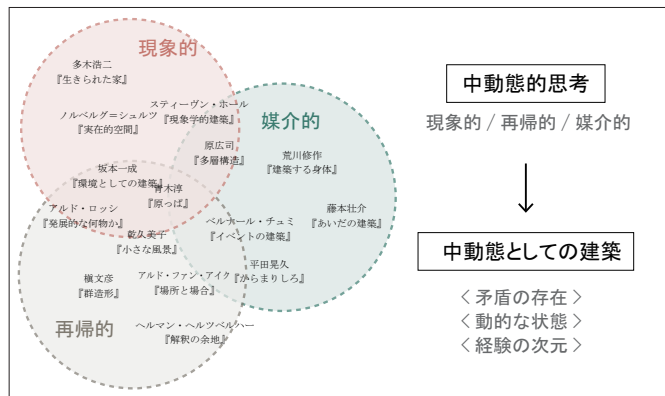


図5 諸理論との関係性

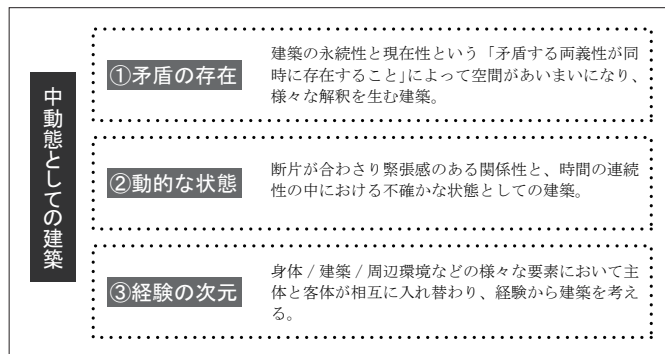


図6 概念の整理

呼び寄せ、想定していないほどのからまりあいを形成し、それがさらなるからまりを誘発していくことに建築の美学があるとした。

3.2.3 経験の次元

多木浩二は「生きられた家」において、住むという行為が空間化していく過程において、家という主体が成立していく（生きられた空間）とし、行為の構造化による建築の現象の可能性を見ている。また、S.T. ホールはそのような観察的視点とは逆に、身体的な経験からの現象的な建築を「絡み合いの建築」とし、「自己自身を、建築という複数のランドスケープで織り上げられたものの中に挿入し、かつそれを逆に身体の中へ挿入する」ことに自己が意識的になった時に建築が生成されるとした。ルベルグ＝シュルツは、環境について人間に安定したイメージを形成させる「実在的空間」としそれは「一つの心理学的概念であって、それは、人間が、環境と相互に作用し合いながら満足に生活して行けるために発達させるシエマなのである。」とし、それを実現させるのが建築空間であるという、身体と環境との発展的過程に建築空間の成立を見ている。

章結

それぞれの理論の考察より、中動態としての建築を考えるためのキーワードや建築における諸概念との関係性を整理し、『中動態としての建築』の概念を規定した(図6)。

第4章 中動態としての建築の構築

第4章では前章で考察の対象とした建築家の作品への言説から、「中動態としての建築」を実体としての建築に近づけていくための構築手法を抽出した。(図7)

4.1 構成手法に見られる中動態的思考

全てに共通して異なるスケールや次元を重ね合わせることで建築の形式性を弱めるような傾向が見られた。これらは、形式性を弱めることによって多様な解釈を許容するような空間を求めている。

その上で、建築を構築する手法をアプローチの方向から、概念の組み合わせなどによる多重解釈性を促すような「意味的構築」、経験などの身体的なものから建築を組み立てていくような「知覚的構築」の2種類に分類した。そして意味的構築を「境界の曖昧化」「構成の重層」、知覚的構築から「経験からのズレ」「経験からの構築」の計4つに分類した。

4.2 意味的構築

意味的構築においては、異なる意味の層が存在することで、それらに緊張感がある関係が生まれ、境界を曖昧にしていく「境界の曖昧性」、複数の建築を構成する層の重ね合わせることで、さまざまな出来事を許容する「構成の重層」の手法が見られた。

4.3 知覚的構築

知覚的構築においては、日常的な生活や経験の園長から、少し違和感を与えることにより身体への感覚を喚起する「経験からのズレ」、私的な感覚や身体的経験から、行為を触発するようなシーンのつなぎ合わせとして建築を構築していく「経験からの構築」が得られた。

第5章 建築的操作の分析

5.1 分析対象の抽出

次に、それぞれの作品に見られる操作について分析する（表1）。ここでは前章で扱った建築家の作品から、前章で分析した構築手法に対する具体的なデザインにおける手法を分析し考察する。まず、分析から得られた4つの方向性を軸にし、その実現を試みた設計手法の分

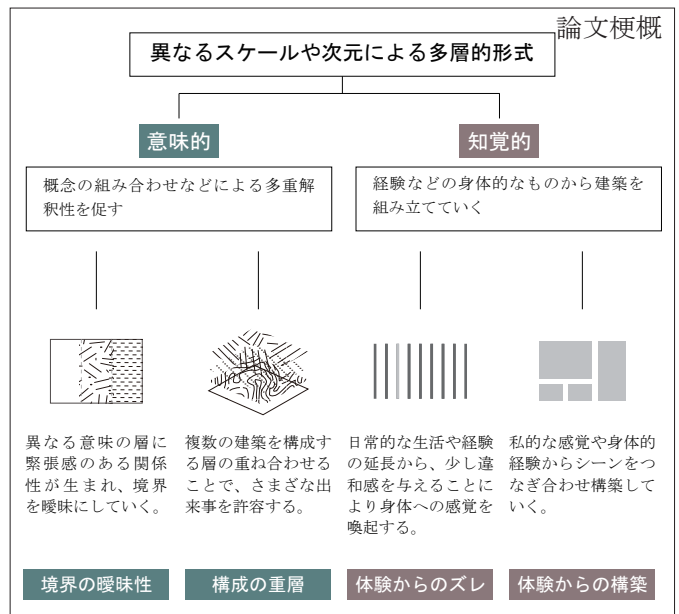


図7 構成手法の分類

表1 分析対象事例

No	事例名	竣工年	設計者
1	Orphanage	1955-1960	
2	Sculpture Pavilion	1962	Aldo van Eyck
3	Schmela House and Gallery	1967-1971	
4	Deift Montessori School	1977-1981	
5	De Drie Hoven, residential building for elderly people	1964-1974	Herman Hertzberger
6	デグラードの噴水	1965	
7	ガララデーの集合住宅	1967-74	Aldo Rossi
8	ボルゴリッコの新市庁舎	1988	
9	ラ・ヴィレット公園	1982	Bernard Tschumi
10	コロンビア大学ターナー学生センター	1997	
11	末田美術館	1981	
12	田嶋美術館	1986	原広司
13	虎十公園林フォレストハウス	1986	
14	ヘルシンキ現代美術館	2008	Steven Holl
15	ヘルニング美術館	2009	
16	東工大蔵前会館	2009	坂本一成
17	宇土市立網津小学校	2009	
18	馬見原橋	1995	
19	三次市市民ホール	2015	青木淳
20	大宮前体育館	2014	
21	七ヶ浜町立七ヶ浜中学校	2018	
22	延岡市駅前複合施設	2018	乾久美子
23	釜石市立唐丹小学校/中学校/児童館	2019	
24	sarugaku	2007	平田晃久

状態としての構築

断片の並列



形式の揺らぎ



構成の同時性

強弱の調整



類を行った。そこからそれぞれ2つずつ、計8つのくくりが得られた(図8)。

5.2 境界の曖昧化

〈断片の緊張関係〉では、要素をヒエラルキーなく並列することにより、緊張関係を作り、何かが起こりうる動的な平衡状態を作り出している。〈形式の緩み〉では、幾何学などの形式を不完結にすることで形式性を弱め、形式の強さを抑え、どっちとも取れるあいまいな空間を生み出している。以上のような均衡状態や曖昧な空間において、その場における身体や事物が横断することにより、豊かな空間体験を生む。

5.3 構成の重層

〈強弱の調整〉では形式として強いものに対して、別の形式を同時に使い、それらを中和させるのではなく、同時に存在しつつ打ち消しあうことで全体性がありそうで内容な状態を作っている。〈身体/架構スケールの共存〉では、都市的なスケールの空間において身体的なスケールの操作を挿入することで、オーバースケールの空間がただの空白としてではなく、身体の延長の余白として存在するようになる。

5.4 経験からのズレ

〈静寂の創出〉は単純な形態の反復などにより、もともと持っていた形態の意味が薄れ非日常的な状態を作り、非日常と日常が重なり合うことで、空間に溶け込むような感覚を生む。〈連続性と違和感〉は少しオーバースケールになることで本来の機能的な場所が余白として感じたり、単純な形態の反復が要所でズレたり別のルールを挿入することで、日常的な経験に変化を与える。

5.5 経験からの構築

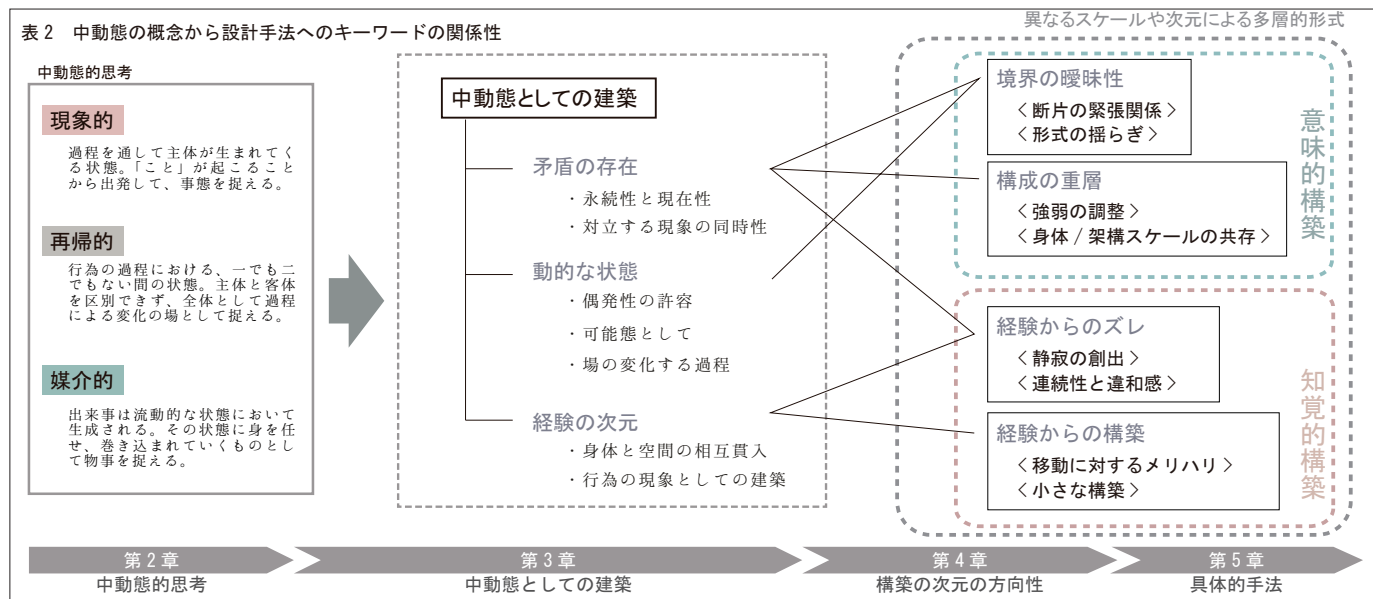
〈移動に対するメリハリ〉はエントランスや階段などの空間体験の節目となるような場所に場面の転換を生むような視点の変化などの体験の変化をもたらすような操作が見られた。〈小さな構築〉とは身体スケールの操作を積み上げていくことで一種の全体性を生んでいる。感覚的に寄り添いたくなるような場が点在することで、使用者と建築とが一体となる。

章結

4・5章を通して中動態としての建築を実現するため手法を、構築手法と実際の構築物に見られる操作を段階的に分析をした(表2)。



図8 設計手法の分析



6章 設計提案

本章ではこれまでの「中動態としての建築のあり方」に関する考察を踏まえて、実際の敷地に対して設計提案を行う。

6.1 敷地

6.1.1 ニュータウンと中動態

篠原はニュータウンを〈現実感の薄い〉合理的に計画された空間と定義し、整備から時が経ちオールドタウンと揶揄されるように荒廃が進みつつある現状に、人々が入り込む余地を見出している。(図9)

これはニュータウンが能動的な空間であるニュータウンにおいて、人々が受動的に生活していたと置き換えることができ、荒廃しつつある現在において、人々の身体的な関わりにおいて生成していくような中動的な余地が生まれていると言えるのではないだろうか。

6.1.2 計画都市の空白

敷地は多摩センター駅にある現在は駐車場として利用されている場所である。多摩センターは歩車分離によって歩道が整備され、計画的に商業施設、アミューズメントパーク、公園などが配置されている。歩車が分離された状態において、歩道レベルの構築物がない現状の敷地は、その一角において穴のような空白となっている。

6.1.3 ニュータウンとヤギ

現在、駐車場と歩道の法面において4-11月にかけてヤギによる除草が行われている。これらのヤギは、除草という目的的に導入されているという面と、動物自体を理解することのできない他者としての面という両義性を持っている。(図10)

6.2 設計提案

立体駐車場とヤギ牧場の複合建築の提案を行う。機能的な駐車場という要素と、機能的な面だけでは捉えられないヤギという要素を複合させ、使用者と建築との新たな応答性を持った中動態としての建築とすることで、様々な要素を許容する新たな場を創出する。中動態としての建築がこの場所を変容させるきっかけとなる。(図11)

①立体駐車場の再解釈

②構成要素の重層

③動線の延長

7章 総括と展望

概念の考察、手法の抽出、設計提案を通して中動態としての建築のあり方を整理し、設計提案において中動態という視点が使用者と建築とが相互に作用し合うような建築を実現するため有効な手法であることを示した。

■『生きられたニュータウン 未来空間の哲学』篠原雅武 (2016) 論文梗概



「ニュータウンとは、自己完結化を志向するツリー状の空間秩序に基づき、物事が整序され、予期可能なものとして馴致される、という環境的な特徴を有する。その特徴が、〈現実感のなさ〉を生み出している。ただし、それが異物であることは、人口増加による成長が止まり、ニュータウンが放擲され、〈荒廃〉が進む中で、顕在化しつつある。」

図9 計画的なニュータウンとその荒廃



図10 敷地条件

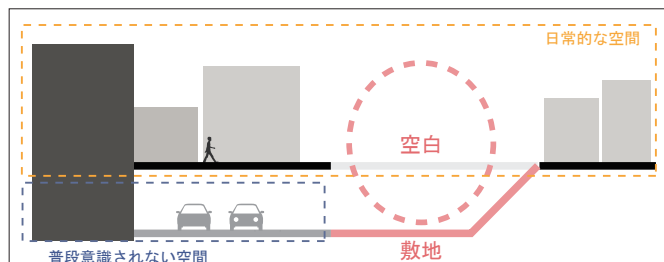
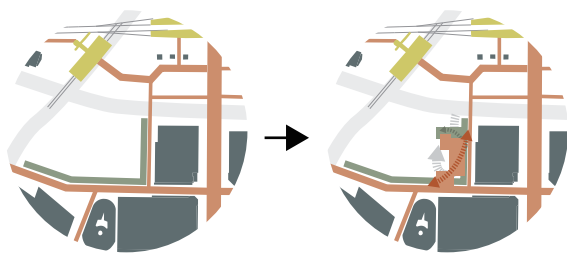


図11 ニュータウンにおける空白を改変する

- 【主要参考文献】
- ・「芸術の中動態 - 受容と制作の基層 -」 森田亜紀 2013
 - ・「中動態の世界 - 意志と責任の考古学 -」 國分功一郎 2017
 - ・「線の生態人類学」 ティム・インゴルド 2018
 - ・「コモナリティーズ ふるまいの生産」 アトリエ・ワン 2014
 - ・「イメージの人類学」 簡内匡 2018
 - ・「空間 建築 身体」 矢萩喜徳郎 2004
 - ・「生命論的建築の研究 <からまりしろ>の概念をととして」 平田晃久 2016
 - ・「生きられたニュータウン」 篠原雅武 2015
 - ・「曖昧の七つの型」 W. エンフゾン 1974
 - ・「空間の経験」 イーファー・トゥアン 1993
 - ・新建築 ・SD ・a+u ・建築文化

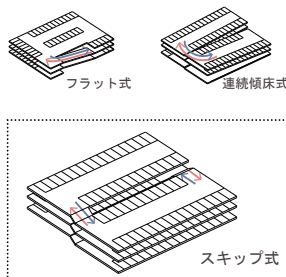
①立体駐車場の再解釈



ニュータウンにおける立体駐車場を中動態として考える。ただ車を停める機能としてのみ捉えるのではなく、地下と地上を結ぶ動的な場として捉えられるのではないだろうか。敷地においてそれぞれを延長させるように交差させていく。

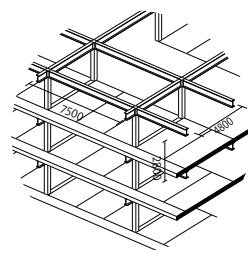
②構成要素の重層

●形式の決定



駐車台数の効率、敷地の形状、駐車しやすさから、立体駐車場の形式をスキップ式に決定した。

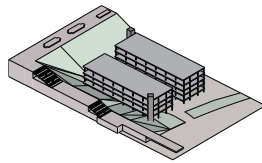
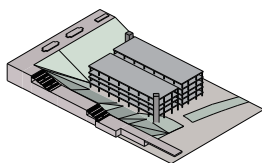
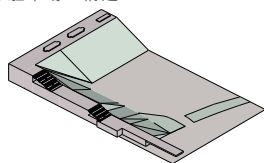
●駐車場の構造



構造をコスト面、スキップフロアの操作の柔軟性から鉄骨造とし駐車場の基本グリッドを4800×7500とした。

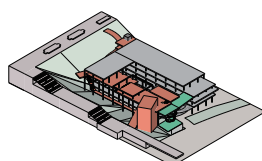
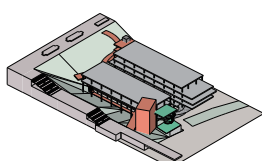
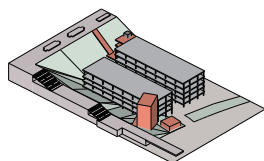
③動線の延長

●駐車場の構造



敷地に対して、スキップ型の立体駐車場を設置する。

斜面に食い込むように移動する。移動した分の中庭が生まれる。

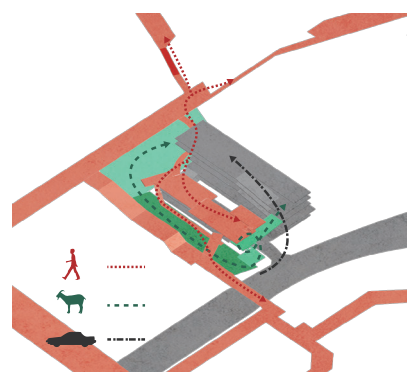


歩道に対して縦動線と管理室、デッキを加える。

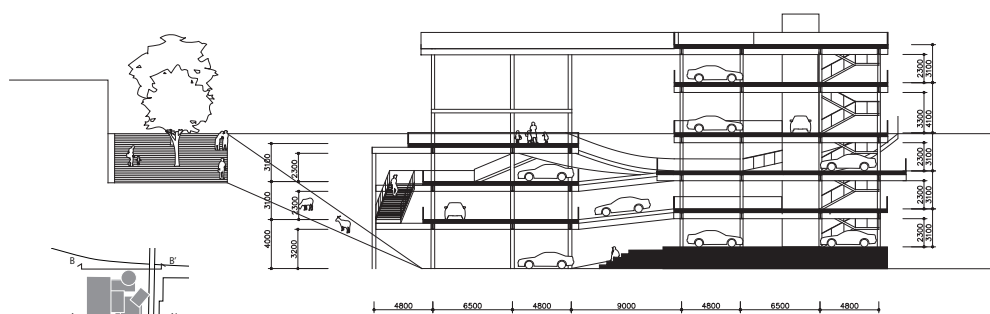
各動線を延長し、スロープの曲線と呼応させる。斜面の下部に光を入れるため、駐車場を削る。

歩道を上方向にも伸ばし、各要素が重なり合う。

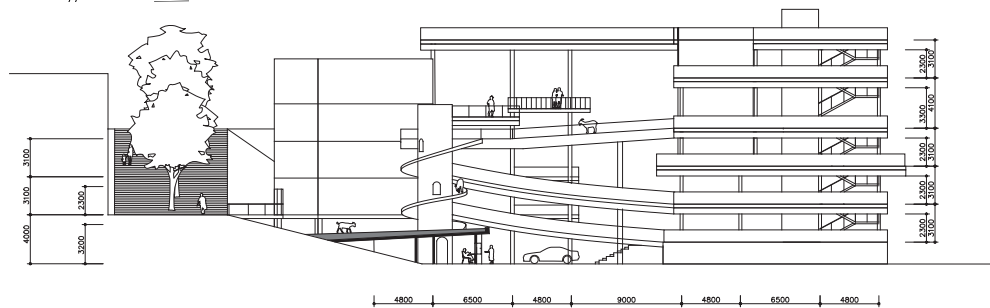
●動線が延長され巻き込まれていく



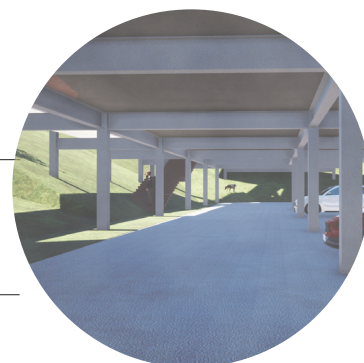
立体的に各要素が混在する空間とする。部分の固有性を保ちながら、部分の領域を超えて関係が重層した全体を構築する。



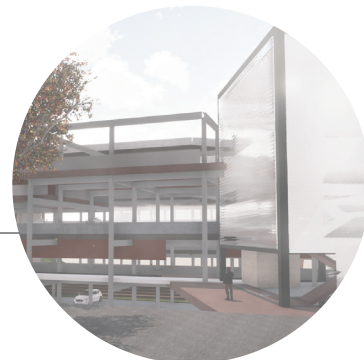
A-A' 断面図 S=1/600



B-B' 断面図 S=1/600



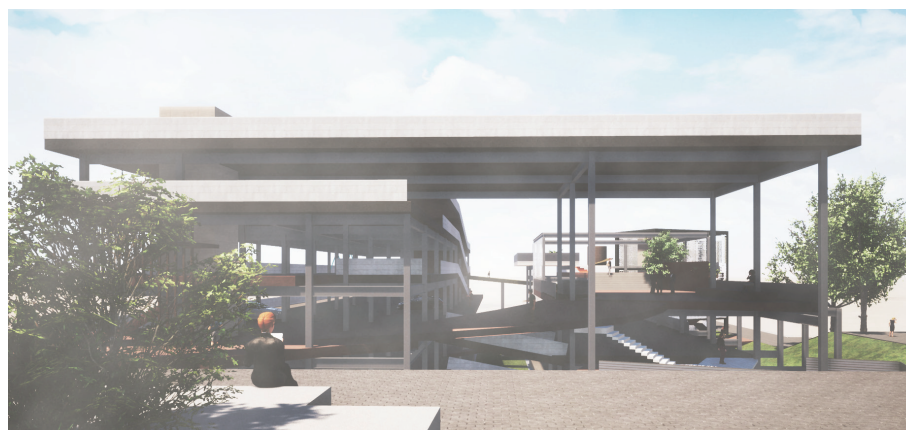
立体駐車場と法面の間から光が入り、ヤギのいる法面を際立たせる。



駅側から立体駐車場への入り口。構造体の隙間から様々な要素が見え隠れする。



スロープにより屋上広場へと接続する。車/人/ヤギの移動するスロープが混在する。



商業施設側の歩道からの眺め。立体駐車場のおおらかな空間を貫くように歩道が伸びる。人通りの多い交差点側に大空間があることで、ニュータウンとのスケール感を調整する。